

707
6

707-306



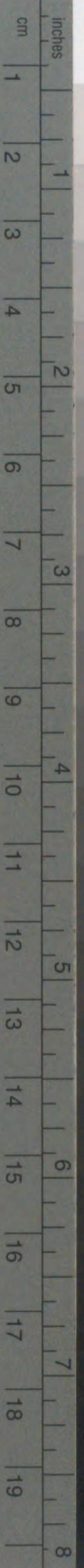
高松工業振興協会編
業地としての高松

Kodak Gray Scale



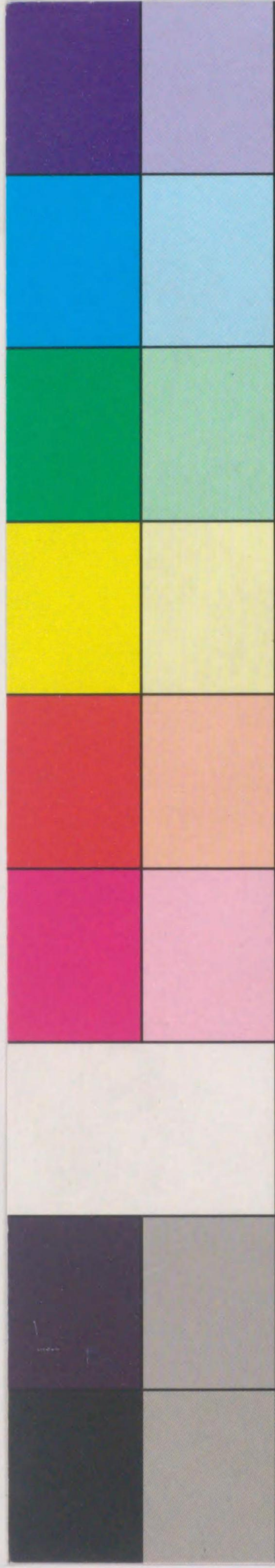
© Kodak, 2007 TM: Kodak

- A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



Kodak Color Control Patches

- Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

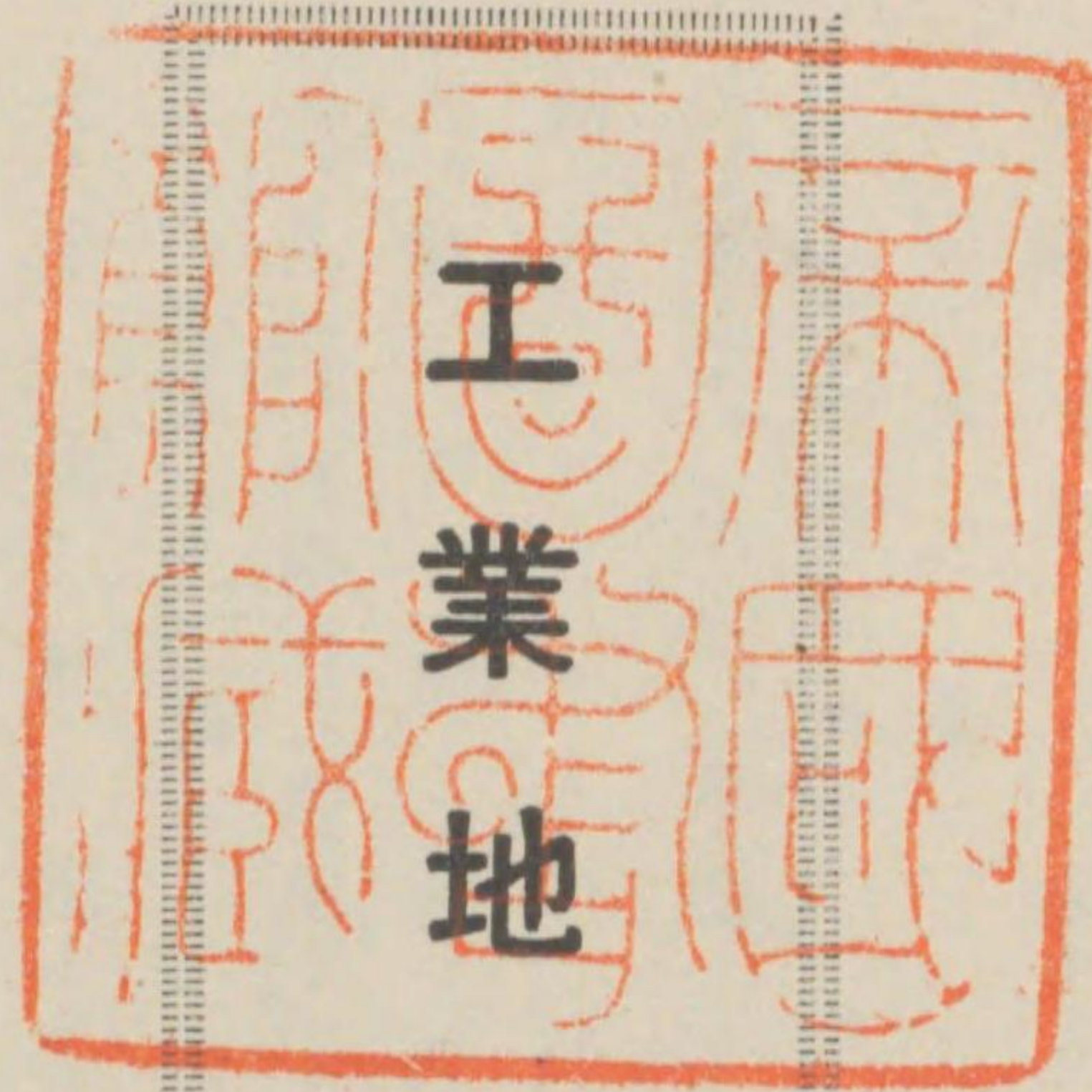


© Kodak, 2007 TM: Kodak

70
306

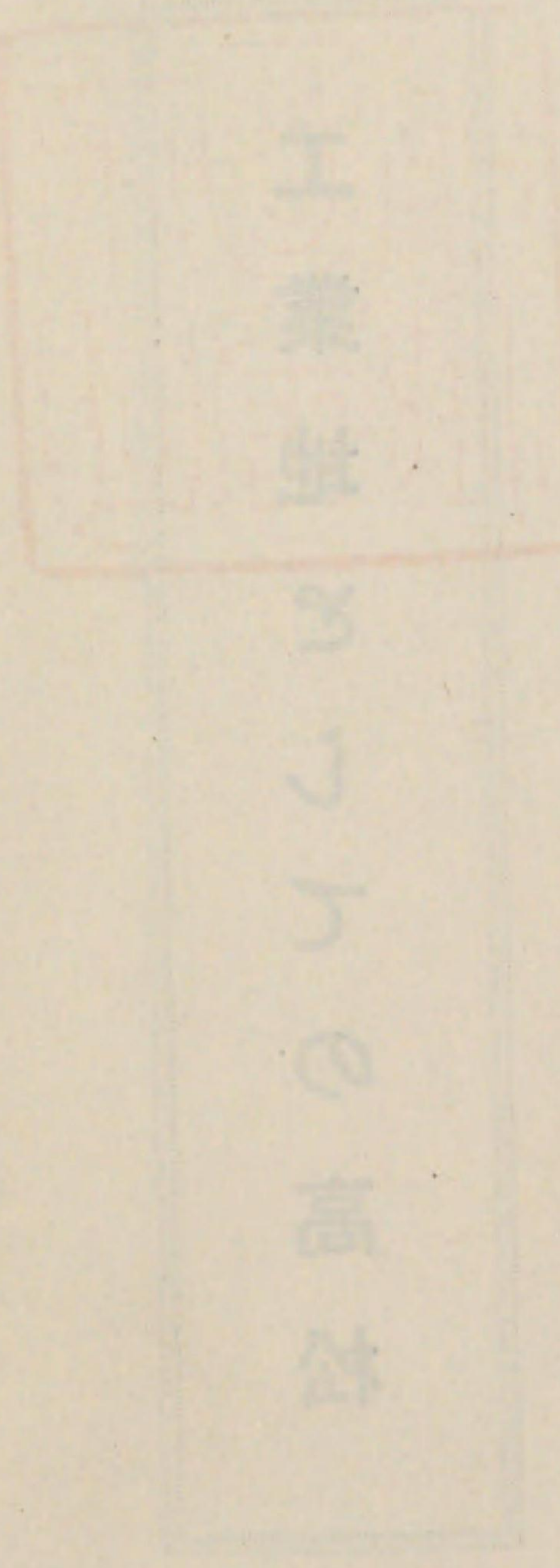
工業地としての高松

高松工業振興協會



としての高松





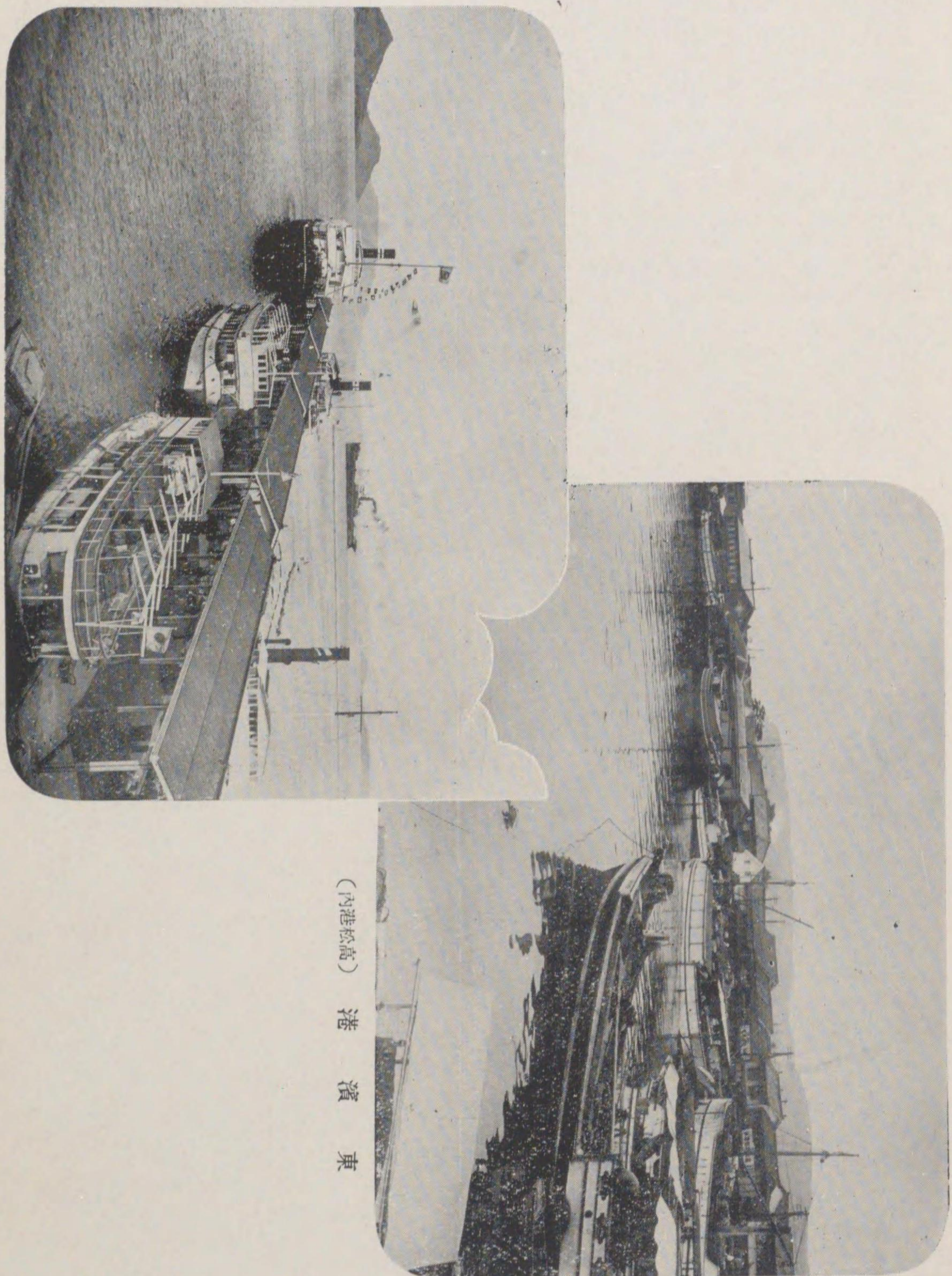
目次

緒言	一
一、地勢、地質	二
二、氣象	二
(イ)氣溫	(ロ)雨量
(ホ)最多天氣	(ヘ)濕度
(ニ)風向	(ハ)風力
三、水量、水質、水源	六
四、戶口	七
五、教育概況	七
六、人情、勞働力、衛生	八
(イ)人情	(ロ)勞働力
(ハ)衛生	
七、産業狀況	三
(イ)生産物價額	(ロ)工産物價額
八、原料、材料、燃料	七
(イ)普通原料材料	(ロ)未開發工業原料
(ハ)燃料	
九、動力	二四
(イ)電	(ロ)瓦斯
十、海、陸、空、交通狀況	二六
(イ)海運	(ロ)陸運
	(ハ)空路

十一、工業用地	三六
十二、港灣	三六
(イ)高松港の沿革	
(ロ)高松港の水面積、繋船能力	
(ハ)陸上設備	
(ニ)荷役能力	
十三、金融	四二
(イ)金融機關	
(ロ)組合銀行預金表	
(ハ)組合銀行貸付金職業別	
(ニ)組合銀行有價證券荷爲替取扱高表	
十四、物價	四四
十五、諸稅負擔	四六
(イ)諸稅總額	
(ロ)現住戶數一戸當負擔額	
(ハ)現住人口一人當負擔額	
(ニ)四國各市諸稅負擔額	
(ホ)各種工場稅負擔額	
結語	五〇
附錄	
四國地方圖	
香川縣圖	
高松市都市計畫圖	



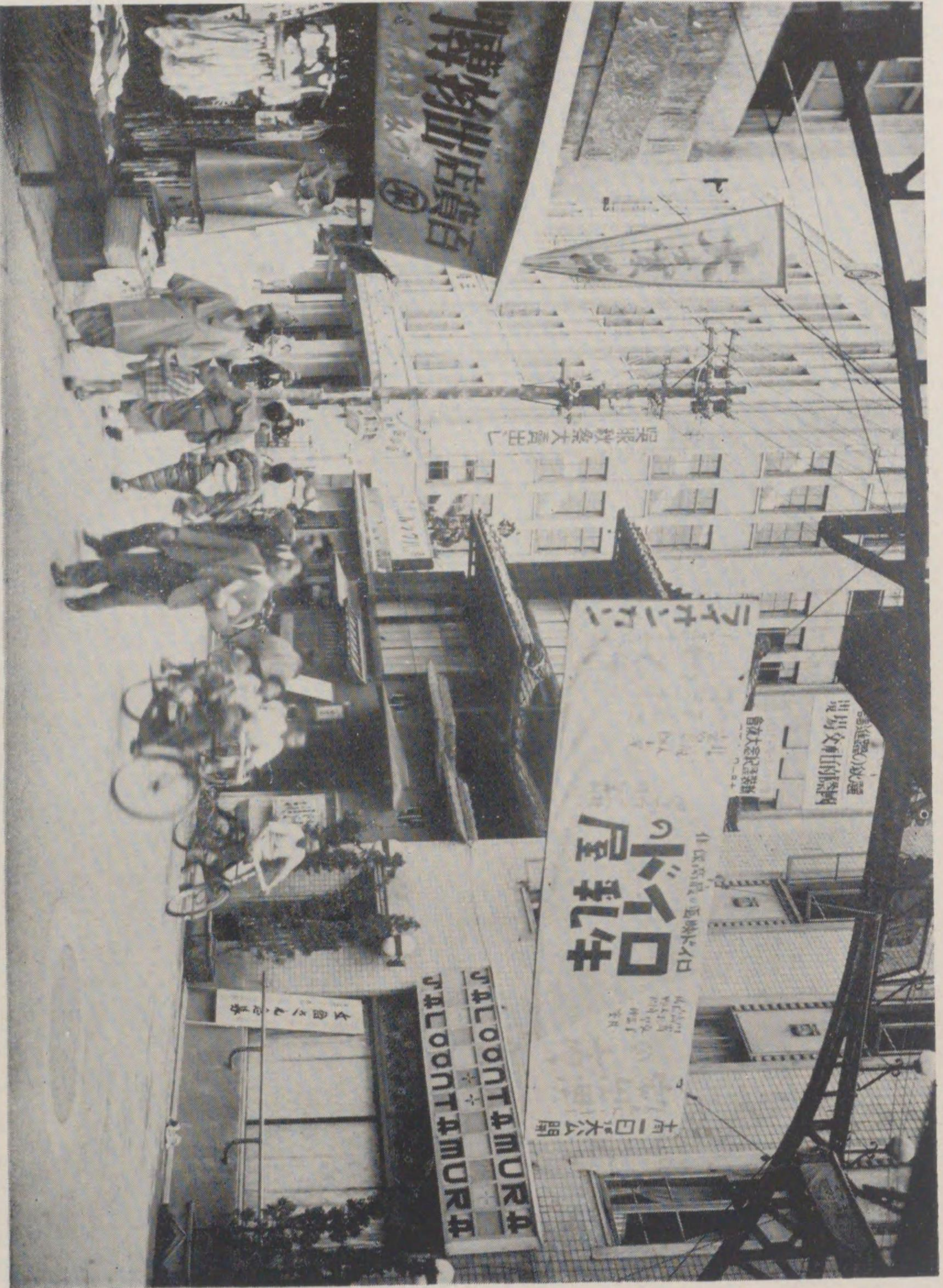
高松市全景



高松港

東濱港(高松内港)





高松市商店街

工業地としての高松

緒言

高松市は世界唯一の海の公園瀬戸内海国立公園の中心地であり、四國四縣の關門であるのみならず、其の周圍近くに幾多の名勝舊蹟のある關係上、近來觀光客の來往殊に繁く眞に觀光の都市として内外に喧傳せられてゐるが、工業の方面は未だ頗る不振であつて見るべきものが至つて少ないのは甚だ遺憾である、識者間では夙に此の状態を憂慮せられ是非共速に之が振興を圖らなければならぬと云ふ氣運に促がされて居つたが最近國家總動員、災害の防避、産業の合理化等の見地から都市の集團的工業を、漸次地方に分散せしめやうとする傾向が次第に濃厚となつて來た、此の機會に於て市及商工會議所は互に協力して工業振興協會を設立して工場を新設せんとする場合事業家各位に對し諸般の便宜を供與し各種の調査斡旋を爲し併せて一般工業の振興を圖ると言ふことゝしたのである、幸に微力なる本協會の事業が企業家各位の事業經營の上に聊かなりとも貢獻することが出來得たならば設立の趣旨にも副ふわけで誠に望外の仕合であると思つてゐる、何卒本協會の使命を諒とせられて十二分に鞭撻利用せられんことを望む次第である。

本冊子は如上の目的を以て工業地としての香川縣及高松の概念を御諒知願ふ趣旨で編纂したのであつて従つて以下記述する處は特に工業に深き關係を有つと思はれる事項のみに付極簡易に記載したものであつて實際に當つては御要求に應じ如何なる點に於ても調査斡旋の努力を惜まぬ積りである。

一、地勢、地質

高松市は其の面積〇・六九方里にして其の西南方に標高二〇〇米内外の高地を負ふのみにして坦々たる平地に横たはる海岸都市である、瀬戸内海を隔て、中國と相對し愛媛、高知、徳島の各縣とは鐵道に依つて連結せられ事實上四國四縣の關門地たるの状況にある。

今や隣接町村合併の氣運は漸次濃厚となりつゝあるを以て近き將來に於ては必ず實現するものと思ふ。此の曉に於ては高松市の面積は一躍數倍のものとなり交通設備の完備と相俟つて工場地の選定設備に至大の便利を得るに至るであらう。地質は平地部は主として花崗岩質、砂礫及粘土層から出來て居るが山地部は主として熔岩層により出來て居る。

二、氣象

(イ) 氣温

昭 和 五 年	昭 和 六 年	昭 和 七 年	昭 和 八 年	昭 和 九 年	最高		最低		年 中 平 均
					最	高	最	低	
三 五 ・ 九	三 四 ・ 七	三 六 ・ 三	三 七 ・ 八	三 六 ・ 八	不 明	零 下	五 ・ 八	五 ・ 三	一 七 ・ 三
同	同	同	同	同	同	同	同	同	一 六 ・ 五
同	同	同	同	同	同	同	同	同	一 六 ・ 七
同	同	同	同	同	同	同	同	同	一 七 ・ 三

昭和五年より同九年に至る平均氣温は一六・九度、最高三七・八度、最低零下五・八度にして氣候に極めて温暖である。

(ロ) 雨量

降雨量表

降雨量は極めて少く昭和五年より同九年に至る間の平均一ヶ月の雨量は九一・一ミリにて更に之を各月別に見るに一月の平均量三二・六ミリを最低とし七月の一九六・八ミリを最高とする。

昭 和 五 年	昭 和 六 年	昭 和 七 年	昭 和 八 年	昭 和 九 年	每 月 平 均	一 月	二 月	三 月	四 月	五 月	六 月	七 月	八 月	九 月	十 月	十 一 月	十 二 月
						二 四 ・ 六	七 ・ 三	七 ・ 五	三 ・ 八	四 ・ 二	一 九 ・ 八	六 七 ・ 〇	三 五 ・ 七	三 五 ・ 六	四 三 ・ 三	二 五 ・ 五	
二 四 ・ 六	七 ・ 三	七 ・ 三	七 ・ 三	七 ・ 三	二 四 ・ 六	二 四 ・ 六	七 ・ 三	七 ・ 五	三 ・ 八	四 ・ 二	一 九 ・ 八	六 七 ・ 〇	三 五 ・ 七	三 五 ・ 六	四 三 ・ 三	二 五 ・ 五	
同	同	同	同	同	同	一 四 ・ 三	四 四 ・ 三	三 ・ 四	一 〇 ・ 三	九 ・ 一	一 〇 ・ 七	四 二 ・ 四	三 六 ・ 六	二 七 ・ 一	一 七 ・ 一	五 ・ 〇	五 六 ・ 八
同	同	同	同	同	同	一 三 ・ 五	二 〇 ・ 五	二 ・ 五	一 七 ・ 三	九 ・ 一	一 三 ・ 五	二 七 ・ 九	六 六 ・ 三	三 ・ 三	二 九 ・ 五	一 五 ・ 六	六 三 ・ 三
同	同	同	同	同	同	三 ・ 〇	三 〇 ・ 二	四 ・ 五	二 〇 ・ 九	三 ・ 三	九 三 ・ 三	二 四 ・ 三	三 三 ・ 七	一 六 ・ 八	一 五 ・ 七	一 一 ・ 〇	三 九 ・ 四
同	同	同	同	同	同	三 ・ 六	五 〇 ・ 一	六 ・ 七	二 〇 ・ 二	六 三 ・ 〇	一 二 四 ・ 〇	一 九 六 ・ 八	六 三 ・ 九	一 四 九 ・ 三	一 〇 三 ・ 一	八 三 ・ 〇	三 七 ・ 七

(ハ) 風力

風力は其最强風に付いて見るに平均風力一月、二月の五を最大とし七月、八月の四を最小とする。

註 風力を六階級に分ちて其強弱を表す。

風力表

(最强風に付き)

昭和六年	昭和七年	昭和八年	昭和九年	平均
七三・六	七三・六	七三・三	七三・六	七三・六
七四・三	七三・一	七三・五	七三・九	七三・九
七三・四	七三・九	七三・八	七三・九	七三・三
七三・〇	七四・六	八〇・八	七九・〇	七三・六
七三・四	七三・九	七三・八	七三・二	七三・四
七三・七	八〇・二	七三・二	七四・六	七三・五
八六・一	八〇・九	七三・六	七三・三	七三・九
九一・九	七三・九	八二・七	七三・八	七三・三
九一・六	八〇・六	七三・七	七三・五	七三・二
七六・〇	七三・六	七三・五	七五・八	七五・〇
八二・三	七三・八	七三・九	七三・〇	七四・七
七四・四	七三・二	七三・七	七三・五	七四・四
七三・九	七三・三	七四・九	七三・五	七三・九

三、水量、水質、水源

香川縣は國境の分水嶺より海に至る距離短かく加之傾斜は相當急であり雨量は一ヶ年平均千二、三百ミリメートルにして全國中最も少き地區に屬するが爲地下水は概ね少く従つて水質も亦不良なる所が多い、殊に沿海の低地に於ては津田町大野原村の一部を除けば他はあまり良好ではない。

他府縣の都市の多くは大なる河川流域の平野を控へて開かれた土地である爲水に恵まれて居る所多いが我高松市は僅々流程六、七里に過ぎざる香東川が市の西方にあるのみであるから地下水には餘り恵まれて居ない。

市内の水量及水質は舊香東川の川筋と推定せらるべき地域（市の西部に存在する香東川は昔現在の市の中央部を南北に貫流し居たり）は地質砂礫にして地下水多く水質も良好であるが之より東西に離るゝに従ひ粘土質となり地下水少く溶存物質多く殊に鐵分の爲水質不良である。

近年に至つて人口は漸次増加し加ふるに手漉製紙工業は悉く機械漉工場と化し、大量製産が行はるゝに従つて多くの水量を要することゝなつた爲地下水を多量に揚水する等各種の事情は水の需要を激増し、爲に一般的に水量を減少せしめて居ることは事實である。

されど目下市の上水道は香東川下流の伏流水と市内に散在する數個の鑿井とに依りて充分に需要を充たしつゝある現状なれども尙萬全を期する策として多額の經費を投じ香東川を雨期に於て表流する多量の水を大貯水池に導きて之れを貯へ乾燥期の水不足に備へることゝなり目下工事施行申請中なるを以て昭和十四年に於ける之が完成の曉は相當の水量を得ること敢て難からざるものと思はれる。

四、戸口

高松市の市制を施行したのは明治二十三年二月で、大正三年、同十年、同十一年の三回に亘つて隣接町村を合併編入したが、爾後二十餘年間は全く合併を行つて居ない。昭和十年末の本市現在戸數一八、八五三戸、人口八七、一五四人であるが現在市の隣接町村は頗る人口稠密となり商工業亦隆盛に趨いて來たが近時それ等の合併氣運も漸く熟しつゝあるが近く其の編入見たる曉は人口十四、五萬に達するものと思ふ。

五、教育概況

香川縣は吾國に於ける教育縣として有名であるが中にも高松市内小學校の設備と其の教育施設は極めて完備してゐる、現在は市立小學校建築中のものを併せ十一校と青年學校が十一校ある。

又中等教育の機關として公立中等學校二校、商業學校、工藝學校各一校、高等女學校三校、市立實科高等女學校一校ありてそれ等の施設經營は全國稀に見る優秀なるものである、官立專門學校としては高等商業學校がある。

高松市は氣候溫暖で人情に厚く風光も亦特に明媚で歴史的偉人も附近より輩出せられ洵に子弟教養の爲めには缺ぐる處

なき土地である。

六、人情、労働力、衛生

(イ) 人情

香川縣は氣候溫和にして風光明媚な瀬戸内海に面してゐる、自然の環境は自から人心に影響して温和中正な市民を生ずるに至つた、輕佻詭激に走らず醇厚中正を守り恭儉勤勉にしてよく業に服する性質を具備して居る。

(ロ) 労働力

香川縣は面積狭小で其廣さ僅かに百二十方里に過ぎざるも人口總數七十四萬八千六百二十七人(昭和十年調)を數へ一方里に付實に六千二百三十八人を抱擁し、人口密度は全國各府縣中福岡縣に次いで第六位に當つてゐる、耕地面積亦極めて少く農家一戸當面積は凡そ五反歩前後にして自然農村の人口は大いに過剩を呈してゐる、従つて農村の子弟にして縣外に出稼する者非常に多い現状であるから勞力を得るに甚だ容易である、加ふるに讃岐人は古來より手先巧者を以て世に知れて居る、此點は勤勉誠實なる性格と相俟つて労働能率を昂ぐるに充分であると思はれる。

今市内の普通賃銀を示せば左表の通である。

高松市普通賃銀表

種別	男女	賄有無	昭和五年度	同六年度	同七年度	同八年度	同九年度	平均
----	----	-----	-------	------	------	------	------	----

農作年雇	男	賄付	一〇〇〇〇	一〇〇〇〇	一〇〇〇〇	一四〇〇〇	一四五〇〇	一七〇〇〇
農作日雇	男	〃	一〇〇	〇七〇	〇七〇	〇七〇	〇九〇	〇八〇
農作日雇	女	〃	〇六〇	〇五〇	〇五〇	〇六〇	〇七〇	〇五八
養蠶日雇	女	賄ナシ	〇八五	〇七〇	〇七〇	〇八〇	〇八〇	〇七七
蠶糸繰日給	女	〃	一・二五	一・一〇	一・一〇	一・〇五	一・〇〇	一・一〇
紡績職日給	男	〃	〇九〇	〇七五	〇七五	〇六五	〇六〇	〇七三
機織職日給	女	〃	〇七〇	〇七〇	〇七〇	〇七〇	〇六〇	〇六八
塗師職日給	男	〃	一・一〇	一・〇〇	一・〇〇	一・五〇	一・六〇	一・二四
染物職日給	男	〃	一・一〇	一・〇〇	一・〇〇	〇九〇	〇八〇	〇九六
洋服仕立職日給	男	〃	一・五〇	一・二〇	一・二〇	一・三〇	一・五〇	一・三四
和服仕立職日給	男	〃	一・〇〇	〇八〇	〇八〇	〇八〇	一・〇〇	〇八八
靴職日給	男	〃	一・五〇	一・三〇	一・二〇	一・〇〇	一・〇〇	一・二〇
杜氏職日給	男	賄付	二・二〇	二・〇〇	二・〇〇	三・〇〇	三・三〇	二・五〇
醬油造職日給	男	〃	一・二〇	一・二〇	一・二〇	一・一〇	一・〇〇	一・一四
菓子造職日給	男	〃	一・二〇	一・二〇	一・二〇	一・一〇	一・二〇	一・一八
大工日給	男	賄ナシ	一・五〇	一・三〇	一・五〇	一・五〇	一・六〇	一・四六
左官日給	男	〃	一・五〇	一・三〇	一・五〇	一・三〇	一・六〇	一・四四
石工日給	男	〃	一・七〇	一・五〇	一・八〇	一・五〇	一・六〇	一・六二
木工日給	男	〃	一・五〇	一・五〇	一・五〇	一・四〇	一・五〇	一・四八
瓦葺職日給	男	〃	一・五〇	一・二〇	一・五〇	一・二〇	一・三〇	一・三四
桶職日給	男	〃	一・二〇	一・〇〇	一・〇〇	一・〇〇	一・二〇	一・〇八

同	同	同
七	八	九
年	年	年
一五四	二二九	二〇九
二九	七四	四五
いで疫痢、擬似赤痢、赤痢、猩紅熱等である。		

(2) 上水道

本市上水道の水源は市の西方を流る、香東川の伏流水である、水質は極めて良好であるが市の發展につれこの水源地の水量のみには不足を來し勝ちになつたので其後鑿井を設け現在では其數が五ヶ所に上つてゐる、尙將來の爲市の西方に打村に七十二萬餘圓を投じて昭和十一年より向ふ三ヶ年の計畫で貯水池築造工事申請中であるが之が完成の曉は供給能力も亦著しく増大するに至るであらう。

水道使用量並ニ供給量

昭和五年	昭和六年	昭和七年	昭和八年	昭和九年
九、〇一八、三九二 <small>石</small>	九、二八一、六五〇	一〇、八五三、五九六	同	同
一七、五二〇、〇〇〇 <small>石</small>	一七、五二〇、〇〇〇	一七、五二〇、〇〇〇	一七、五二〇、〇〇〇 <small>石</small>	一七、五二〇、〇〇〇 <small>石</small>
一七、五二〇、〇〇〇 <small>石</small>	一七、五二〇、〇〇〇	一七、五二〇、〇〇〇	一一、五〇二、六七六 <small>石</small>	一一、一九七、六四〇
一七、五二〇、〇〇〇 <small>石</small>	一七、五二〇、〇〇〇	一七、五二〇、〇〇〇	一七、五二〇、〇〇〇 <small>石</small>	一七、五二〇、〇〇〇 <small>石</small>

(3) 下水道

本市多年の懸案であつた本工事は昭和九年一月より愈々第一期工事に着手した、其豫算百十五萬圓を計上し五ヶ年間に

工事を完了すべく市内主要方面の幹線工事を急いでゐる。

第一期工事に次で更に第二期の工事に着手せんとする計畫で此の工事の完成を見るに至ると本市衛生状態は更に良好に趣くことゝならう。

七、産業状況

由來讃岐人は手工技に長じ、勤勉の美風に富んでゐるが大規模工業經營の思想に乏しく工業生産に於ては現在倉敷紡績高松分工場綿糸製品が産額の首位にある程度である、其他は本市の在來工業の三大特産品とも稱せらるゝ和紙、彫抜漆器、日傘が工産品として廣く全國市場に出て居るに過ぎない。尙本市は阪神大工業地を近くに控へ僅々數時間で往復するの便があるから自然地方工業は甚不振であつた、しかし未開發工業資源も相當に多く賃銀の低廉や物資集散の至便は企業家工業家の最も注目を要すべき所であると思ふ、最近の生産状況は次の様である。

(イ) 生産物價額表

昭 和 五 年	昭 和 六 年	昭 和 七 年	昭 和 八 年	昭 和 九 年	農 産	畜 産	水 産	工 産	林 産	總 計
二八二、〇八三 <small>円</small>	一八九、六六六	三〇、六七七	三三、八三三	三三、一八九	五四五、二一八 <small>円</small>	三三〇、六六六	六四七、二四三 <small>円</small>	一一、五三二、八三三 <small>円</small>	八六七 <small>円</small>	一三、九六六、二七七 <small>円</small>
二八二、〇八三 <small>円</small>	一八九、六六六	三〇、六七七	三三、八三三	三三、一八九	五四五、二一八 <small>円</small>	三三〇、六六六	六四七、二四三 <small>円</small>	一一、五三二、八三三 <small>円</small>	八六七 <small>円</small>	一三、九六六、二七七 <small>円</small>
二八二、〇八三 <small>円</small>	一八九、六六六	三〇、六七七	三三、八三三	三三、一八九	五四五、二一八 <small>円</small>	三三〇、六六六	六四七、二四三 <small>円</small>	一一、五三二、八三三 <small>円</small>	八六七 <small>円</small>	一三、九六六、二七七 <small>円</small>
二八二、〇八三 <small>円</small>	一八九、六六六	三〇、六七七	三三、八三三	三三、一八九	五四五、二一八 <small>円</small>	三三〇、六六六	六四七、二四三 <small>円</small>	一一、五三二、八三三 <small>円</small>	八六七 <small>円</small>	一三、九六六、二七七 <small>円</small>

品名	昭和九年度	昭和八年度	昭和七年度	昭和六年度	昭和五年度
清酒	四六	三六	二六	一六	一四
線香	四六	三六	二六	一六	一四
下駄	二九	一九	一四	一〇	一〇
農具	一七	一七	一七	一七	一七
麵類	三九	二九	二〇	一六	一六
炭酸飲料	一	一	一	一	一
豆類	七九	六八	六〇	五〇	四九
日傘	六八	五八	五〇	四〇	三九
洋服	九〇	八〇	七〇	六〇	五九
電氣	一四	一四	一四	一四	一四
鐵力	一	一	一	一	一
製綿	三三	三三	三三	三三	三三
晒染	三三	三三	三三	三三	三三
竹製	二七	二七	二七	二七	二七
鐵釜	二七	二七	二七	二七	二七
雨傘	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇
清涼	二〇	二〇	二〇	二〇	二〇
皮革	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇
造革	三〇	三〇	三〇	三〇	三〇
ゴム	一五	一五	一五	一五	一五
疊製	五二	四二	三二	二二	二二

品名	昭和九年度	昭和八年度	昭和七年度	昭和六年度	昭和五年度
綿糸	一	一	一	一	一
和紙	一	一	一	一	一
漆器	一	一	一	一	一
木製	一	一	一	一	一
機械	一	一	一	一	一
賣藥	一	一	一	一	一
印刷	一	一	一	一	一
度量	一	一	一	一	一

工産物價額ノ二

品名	昭和九年度	昭和八年度	昭和七年度	昭和六年度	昭和五年度
紙器	一八四、二一〇	一二五、〇〇〇	一一九、七〇〇	一一〇、七〇〇	一一〇、七〇〇
石細工	一〇七、五〇〇	一〇七、五〇〇	一〇七、五〇〇	一〇七、五〇〇	一〇七、五〇〇
傘骨	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇
綿織物	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇
醉物	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇
菊扇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇
扇及團扇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇
玩具	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇
馬具	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇
武具	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇
傘紙	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇
金銀細工	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇
コシ	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇
藤製	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇
瓦管	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇
瓦及土	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇
麥稈	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇
瓦製	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇
醬油	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇
麵粉	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇
提灯	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇
草履	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇
鐵火鉢	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇

(口) 工産物價額ノ一

品名	昭和九年度	昭和八年度	昭和七年度	昭和六年度	昭和五年度
紙器	一八四、二一〇	一二五、〇〇〇	一一九、七〇〇	一一〇、七〇〇	一一〇、七〇〇
石細工	一〇七、五〇〇	一〇七、五〇〇	一〇七、五〇〇	一〇七、五〇〇	一〇七、五〇〇
傘骨	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇
綿織物	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇
醉物	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇
菊扇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇
扇及團扇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇
玩具	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇
馬具	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇
武具	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇
傘紙	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇
金銀細工	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇
コシ	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇
藤製	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇
瓦管	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇
瓦及土	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇
麥稈	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇
瓦製	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇
醬油	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇
麵粉	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇
提灯	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇
草履	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇
鐵火鉢	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇	一〇六、九〇〇

八年度の飼蠶實戸數一萬四千七百五十一戸、收繭高四十四萬六千五百四十八貫、價額二百二十二萬八千三百四十五圓を算してゐる。

昭 和 四 年	昭 和 五 年	昭 和 六 年	昭 和 七 年	昭 和 八 年
飼養戸數	一、三〇八、三二七	一、三〇八、三二七	一、三〇八、三二七	一、三〇八、三二七
種別	白繭	白繭	白繭	白繭
數	二二七、六二五	二二七、六二五	二二七、六二五	二二七、六二五
量	二、一八六	二、一八六	二、一八六	二、一八六
價	一、三〇八、三二七	一、三〇八、三二七	一、三〇八、三二七	一、三〇八、三二七
額	一、三〇八、三二七	一、三〇八、三二七	一、三〇八、三二七	一、三〇八、三二七

◎林産物

(イ) 木材

本市附近には松材相當豊富に産出せられ造船用、彫拔漆器製造、建築用材其の他に用ひられつゝあり、又松材以外の材木は甚だ僅少であるが、土讚線の全通により豊富なる高知材を移入することが容易となつた關係上大いに之を利用することが出来る。

(ロ) 未開發工業原料 (昭和十年末調)

品名	化學的品位	現在用途	產地別	産額又ハ埋藏量
粘土	硅酸含有物	窯業用	縣各地	六八〇、四七二立方尺以上
陶土	同上	同上	同上	同上
長石	同上	同上	同上	同上
小麥	同上	同上	同上	同上
煙草	同上	同上	同上	同上
桑皮	同上	同上	同上	同上
糖皮	同上	同上	同上	同上
麥稈	窒素含有物炭水化學	飼料用	同上	同上
除菊	織素含有物炭水化學	殺虫劑、同加工品	同上	同上
蕃椒	織素含有物炭水化學	殺虫劑、同加工品	同上	同上
粗穀	織素含有物炭水化學	飼料用	同上	同上
豆穀	同上	同上	同上	同上
貝殼	同上	同上	同上	同上
海藻	同上	同上	同上	同上
醬粕	同上	同上	同上	同上
竹材	同上	同上	同上	同上
石油	同上	同上	同上	同上

(ハ) 燃料

料

良質

六八〇、四七二立方尺以上
 一五、七四〇束
 三〇五、〇三二貫以上
 二二二、〇〇〇貫以上
 五〇、三六〇圓以上
 二八〇、〇五四貫以上
 三〇〇、〇〇〇萬貫以上
 二六七、六八五貫以上
 三二〇、五二二貫以上
 二、四五〇、六一七貫以上
 一八〇萬貫以上
 六〇萬貫以上
 一〇萬石以上

本縣に於ける石炭は小豆郡島嶼の一部に於て極めて少量の産出があるのみで大部分九州中國方面の産地から供給を仰いで居るが、何分海陸の運輸が至つて至便である關係上極めて低廉なる運賃に依つて良質の石炭を安價に得て居る。木炭の縣内産額は少量で従來は主として九州對州方面から移入して居つたが、土讃線の開通後は土佐炭が多量に進出して來た爲此の方面も大いに研究を要すると思ふ。

石油は逐年其消費が増加して居る。今此等移出入を示すと左表の通である。

石炭移入調 (高松港)

年	數量	金額	仕向	備考
昭和五年	一〇六、七三五 <small>噸</small>	八四五、七一八 <small>円</small>	若松、宇野	入超
昭和六年	九八、一六六	六八六、七二四	若松、宇野	同
昭和七年	九九、八八〇	七一九、七七四	若松、宇部、元山、崎戸	同
昭和八年	九九、八五〇	七四六、三七九	同、江口、長崎、博多、大牟田	同
昭和九年	九九、八五七	七四九、〇一五	同、大牟田、江口、唐津	同

石炭移出調 (高松港)

年	數量	金額	仕向	備考
昭和五年	四六、九五一 <small>噸</small>	三七一、八〇一 <small>円</small>	小豆島、引田	
昭和六年	四三、九七五	三三〇、五一一	小豆島	
昭和七年	八二二	六一七一	多度津、引田、土庄、鴻元	
昭和八年	八一二	六、二五八	多度津、鴻元、詫間、丸龜、小豆島	
昭和九年	八一三	六、八七五	同	

石油移入調 (高松港)

年	數量	金額	仕向	備考
昭和五年	四、九〇七 <small>噸</small>	三一四、一七六 <small>円</small>	大阪、神戸	入超
昭和六年	六、七二三	三四九、五九六	大阪、神戸	同
昭和七年	一一、六三八	六〇五、一七六	宇野、大阪、若松、神戸	同
昭和八年	一一、六四二	六〇五、三九八	同、大分、岡山	同
昭和九年	一四、一八六	八三三、一九〇	同	同

石油移出調 (高松港)

年	數量	金額	仕向	備考
昭和五年	一、一八四 <small>噸</small>	七七、〇八〇 <small>円</small>	坂出、土庄	
昭和六年	九六七	五〇、五三六	多度津、宇野、岡山	
昭和七年	一一九五	六二、一四〇	觀音寺、坂出、丸龜、土庄	
昭和八年	一一九七	六三、四二六	多度津、庵治、廣島、丸龜、小豆島	
昭和九年	一、八一二	一二〇、八〇六	新居濱、觀音寺、坂出、小豆島、丸龜	

木炭移入調 (高松港)

昭 和 五 年	昭 和 六 年	昭 和 七 年	昭 和 八 年	昭 和 九 年
一八、五〇六 ^噸	八、五五五	八、九九七	八、九九七	八、九六九
二五八、一〇一 ^円	九七、五四三	一〇三、四七三	一〇二、二三一	一一二、〇九七
日向、鹿兒島	小豆島、鹿兒島	宇野、鹿兒島、仁田、廣島	宇野、鹿兒島、廣島、仁田、大分、三島、高知、網島	宇野、鹿兒島、仁田、廣島、大分、三田尻、高知
入超	同	同	同	同
四六、五六〇 ^円	六四、二三九	六二、四九九		

木炭移出調 (高松港)

昭 和 五 年	昭 和 六 年	昭 和 七 年	昭 和 八 年	昭 和 九 年
四、四四二 ^噸	三、四三二	三、四〇五		
五〇、九八三 ^円	三九、二三四	三九、七三二		
大阪、宇野	大阪、宇野、神戸	宇野、大阪、神戸、小豆島、岡山、丸龜		

九、動力

(イ) 電力

工業用動力の重要な要素の一つである電力の供給状況に付いて見るに高松市に對する供給は四國水力電氣株式會社に

依つて爲されてゐる。同社は資本金貳千貳百九拾九萬五千圓にして明治三十年の創立にかゝり稀に見る營業成績優良なる電力會社である、火力發電所及水力發電所を有し水力發電所による出力一萬八千五百キロワット、火力發電所による出力は二萬四千七百二十八キロワット(内一二、〇〇〇キロワット昭和十一年末竣工)で供給能力合計は四萬三千二百二十八キロワットである。

昭和十年中に於ける電力供給量は一二、八一二、九二五キロワット時であり最近五ヶ年間に於ける供給量を示すと、

昭和六年	七、七七九、八三三キロワット時
同 七年	七、八一二、八七七
同 八年	八、〇四〇、一八一
同 九年	九、〇六八、二〇九
同 十年	一二、八一二、九二五

次に市内工場使用電力量(昭和十年)を見るに總計一、七二二馬力と外に大口従量需要家に、三、二四七キロワットを供給して居る。

電力量の將來につきましては既に餘剰電力を生じて居る現状であり又料金につきましては全國平均程度であるが吾が國電力界の全般的傾向として電力料は漸次低下の趨勢にあるを以て本市に於ても今後同様の傾向に進むべきものと思はれる。

(ロ) 瓦斯

瓦期も電力と同様四國水力電氣株式會社より供給せられ市内主要住宅地域は素より商業地域、工業地域にも殆んど行き亘つてゐる、會社一ヶ月の最大供給能力は五六、〇〇〇立方米にして現在需要家への供給量は五三、〇〇〇立方米であつていさゝか餘裕を存してゐるが將來の需要の増加に伴ひ設備の擴張を計畫してゐる、瓦斯料金は一立方米十二錢五厘であつ

て多量使用の向には相當割引が行はれてゐる。

十、海、陸、空交通狀況

(イ) 海 運

高松港は瀬戸内海航路網の中継點に位し、高松港を起點又は寄港地としての航路は實に四通八達の有様であつて神戸大阪へは五、六時間にて、中國とは僅か一時間にて連絡し、十時間餘を費せば九州本土に達することが出来る。寄港船は大阪商船株式會社を初め尾崎汽船株式會社、攝陽商船株式會社、宇和島汽船株式會社等の内海汽船は勿論沿岸航路に就航の大小發動機船等であつて出船入船の有様は文字通り織るが如き盛觀を極めてゐる。

(1) 高松港出入船舶

年	入 港		出 港	
	隻 數	噸	隻 數	噸
昭和五年	二一三、九九二	三、一九〇、一五六	二一三、九九二	三、一九〇、一五六
同 六 年	二一、八四〇	三、四四五、二四八	二一、八四〇	三、四四五、二四八
同 七 年	二二、九一七	三、三八九、九九二	二二、九一七	三、三八九、九九二
同 八 年	二二、八〇八	三、四〇二、五〇〇	二二、八〇八	三、四〇二、五〇〇
同 九 年	二四、四〇六	三、四四六、三二六	二四、四〇六	三、四四六、三二六

(2) 高松港乗降客

年	乗 客			降 客		
	大阪商船	尾崎汽船	其 他	大阪商船	尾崎汽船	其 他
昭和五年	二六七、八七〇人	三〇、〇七〇人	一一、一八〇人	二四四、九九九人	二八、九九五人	一〇九、四三〇人
同 六 年	二四八、〇三三	二九、七二二	一〇、九五九	二二一、一五八	二七、一〇九	一〇四、三〇九
同 七 年	二五三、三〇五	二九、九六七	一一、三三三	二二七、〇〇五	二八、〇六四	一〇六、〇〇〇
同 八 年	二〇、二九	三三、七三三	一五、三三三	二六三、五四六	三二、〇九四	一七、九三三
同 九 年	二八、三九三	三四、五八	二九、〇〇〇	二七五、五二〇	三六、一六三	二二、五六六

(3) 高松港移出入貨物

年	移 出		移 入	
	數 量	價 額	數 量	價 額
昭和五年	三六二、九三七噸	三〇、〇八九、三三三円	三九四、三六九噸	二四、六四一、〇三三円
同 六 年	二四九、二八四	三九、九七五、一一一	四一七、二〇九	二七、一二九、七六九
同 七 年	二〇九、八八五	三三、五三八、五五六	三七二、一九一	二九、二七三、六六〇
同 八 年	二〇七、四六二	三四、五一〇、六五〇	四五二、九九〇	二八、八四一、四二七
同 九 年	二一九、〇三三	二九、四五三、四八〇	四六五、五六四	二八、〇三〇、四七六

(4) 高松港移出入品

移 出 ノ 部

機	棉	織	石	印	綿	砂	鮮	牛	菓	木	人	石	豆	洋	木	書	銅	
械	花	物	炭	物	糸	糖	介	子	材	料	油	粕	紙	炭	誌	金		
類	車	類	炭	物	糸	糖	介	子	材	料	油	粕	紙	炭	誌	金		
二、二三〇、八七五	一、八四七、二九六	九二九、七六〇	一、〇四四、二九六	八四九、七一八	八二八、〇〇〇	七三六、八四八	五七六、三七〇	五五八、〇五五	五五八、〇五五	四八一、五三〇	一、一三九、〇三〇	三一九、八六五	三一九、八六五	三一九、八六五	二七九、六〇四	二五八、一〇一	二四一、〇二〇	一八九、〇〇〇
九〇五、八五〇	一、四三三、二〇〇	八四七、六〇〇	一、〇八六、六六〇	六八六、七二四	八二七、二〇〇	三四六、三二〇	五五一、八五〇	一、〇二〇、八七五	一、二六六、八八三	四七九、八二五	一、〇六〇、七七六	六三三、一五〇	三五八、一五〇	三四九、五九六	三四一、六四六	九七、五四三	二六二、八九〇	一〇二、九〇〇
一、八九一、四六〇	一、二四八、〇〇〇	五一二、一四〇	一、二八五、四八五	七一九、七七四	八三八、四〇〇	一九四、二二〇	四五一、七一〇	一一四、九一五	三五九、九一二	五六七、一一〇	六九〇、七四六	五九八、〇三〇	三九八、七〇〇	一四一、一七六	七七七、〇一八	一〇三、四七三	三二八、四四〇	九八、七〇〇
一、三九四、一〇〇	一、二〇五、四〇〇	一九〇、〇〇〇	一、二二三、四六〇	七四六、三七九	八三六、八〇〇	一九五、一五六	四三〇、六五〇	九〇一、〇五〇	三五〇、一八四	五六〇、〇〇五	六八六、五六八	五九七、一八五	七八一、一九九	六〇五、三九八	一三三、二〇六	一二四、六五六	三二九、一三〇	五六、七〇〇
二、八二五、五二〇	一、二〇六、〇〇〇	一八九、九二〇	一、〇五五、七三〇	七四九、〇一五	八三六、〇〇〇	一九五、四三二	八九八、〇〇〇	三五四、六四〇	六二九、〇八五	五〇三、三三八	一、〇四八、〇六九	五九七、七六五	四二〇、三二六	八三三、一九〇	一三七、二八一	一二六、三二一	一一二、〇九七	七〇、一〇〇

馬	牛	米	麥	食	果	酒	菓	煙	乾	蘭	生	綿	鷄	和	織	機	其
計	實	子	草	類	糸	卵	紙	類	他								
一、二七、四〇〇	二、二四、七四〇	二、二六四、九〇九	一、七七八、五四六	一、八四五、七九二	二、九四、二一一	四一七、四三八	七三五、五二五	七、八一、五二八	四五四、七〇四	一、三九七、〇八八	二、四一九、七二五	一、〇七六、四〇〇	三、四九、一六〇	二、一八四、〇六〇	一、二一八、一二〇	一、九四九、一一七	二、九一五、〇二二
一、一五、三二〇	三、四四、五八〇	一、四六五、九七七	一、七四二、五三五	七四八、三五〇	一九四、三三九	四八三、二五一	七八九、六〇〇	一一、九四四、〇〇〇	二、三三、三三〇	八三四、三〇〇	一〇、二〇三、六一八	一、〇三〇、〇六八	三、八七、五二七	二、一三八、八三三	五八六、八〇〇	一、二四四、一〇〇	四、四八四、五八三
一、三三、六〇〇	二、三三、六〇〇	一、〇九六、五四六	二、一三七、三六二	一、四三二、八三〇	二、三六、三九四	四二二、六一二	七〇六、九九六	一一、五三六、七五〇	二、二一、九四〇	一、一五六、九〇〇	三、五七七、七六一	一、〇三〇、六一二	三、四九、九〇〇	二、〇二六、一〇〇	五六七、三六〇	九一四、〇二〇	三、七五四、二七三
一、三六、〇〇〇	二、〇四、一二〇	一、四九九、九八五	一、七二三、七八〇	一、四〇四、二五二	二、二六、九四二	四三三、七一二	六一二、九四〇	一三、五一三、七〇一	三六一、三五三	一、三九六、八七二	二、四〇二、四〇〇	一、〇七七、三三六	三、四八、〇四〇	二、〇二八、〇四〇	一、二一九、三二〇	一、七四七、三七五	四、一五四、四八二
一、二七、四〇〇	二、二四、七四〇	二、二六四、九〇九	一、七七八、五四六	一、八四五、七九二	二、九四、二一一	四一七、四三八	七三五、五二五	七、八一、五二八	四五四、七〇四	一、三九七、〇八八	二、四一九、七二五	一、〇七六、四〇〇	三、四九、一六〇	二、一八四、〇六〇	一、二一八、一二〇	一、九四九、一一七	二、九一五、〇二二

移入ノ部

品目	仕向港	小荷物				從價割増品	重
		一等品	二等品	三等品	等級		
和紙	大阪	一才以下	二才以下	三才以下	一才以下	同	七才モノ
同紙	大阪	一才以下	二才以下	三才以下	一才以下	同	四才モノ
酒斗	大阪	一才以下	二才以下	三才以下	一才以下	同	六才
醬油	大阪	一才以下	二才以下	三才以下	一才以下	同	同
麥稈	大阪	一才以下	二才以下	三才以下	一才以下	同	十貫十四才
生鳥籠	大阪	一才以下	二才以下	三才以下	一才以下	同	十二貫九才
鑄物鉢	大阪	一才以下	二才以下	三才以下	一才以下	同	十二貫四才
銚火鉢	大阪	一才以下	二才以下	三才以下	一才以下	同	二十貫一才
銚火鉢	大阪	一才以下	二才以下	三才以下	一才以下	同	二十貫一才
素麵	大阪	一才以下	二才以下	三才以下	一才以下	同	十貫二才
和紙	大阪	一才以下	二才以下	三才以下	一才以下	同	七才モノ
同紙	大阪	一才以下	二才以下	三才以下	一才以下	同	四才モノ
酒斗	大阪	一才以下	二才以下	三才以下	一才以下	同	六才
醬油	大阪	一才以下	二才以下	三才以下	一才以下	同	同
麥稈	大阪	一才以下	二才以下	三才以下	一才以下	同	十貫十四才
生鳥籠	大阪	一才以下	二才以下	三才以下	一才以下	同	十二貫九才
鑄物鉢	大阪	一才以下	二才以下	三才以下	一才以下	同	十二貫四才
銚火鉢	大阪	一才以下	二才以下	三才以下	一才以下	同	二十貫一才
銚火鉢	大阪	一才以下	二才以下	三才以下	一才以下	同	二十貫一才
素麵	大阪	一才以下	二才以下	三才以下	一才以下	同	十貫二才

特定貨物賃金

(5) 山陽線自高松港至各港貨物運賃

品目	仕向港	運賃
醬	大阪	一七六、九五四
煙	大阪	二八八、二六〇
足	大阪	一一五、二〇〇
酒	大阪	一二四、三二〇
糠	大阪	一一三、一八五
馬	大阪	三二七、二〇〇
米	大阪	四四一、二九六
食	大阪	一、五六八、一六〇
乾	大阪	八六、七九一
揮	大阪	九一、九〇〇
藥	大阪	一五、三〇三
マ	大阪	六〇、三四〇
金	大阪	一、二九九、六一八
硝	大阪	一五〇、〇〇〇
硫	大阪	三一五、七一六
鐵	大阪	五四、四九〇
生	大阪	二三八、一五三
其	大阪	四、九〇七、九二八
計	大阪	二四、六四一、〇三三
油	大阪	一四二、〇一六
草	大阪	二、二三〇、一四〇
袋	大阪	八四、四〇〇
鹽	大阪	三九七、六〇〇
魚	大阪	一四八、五七七
油	大阪	一五〇、七〇〇
品	大阪	三七七、七三一
麻	大阪	一、〇八五、一七五
類	大阪	二五八、六〇九
子	大阪	一二三、六四八
安	大阪	一四八、〇〇八
木	大阪	二二〇、五八〇
果	大阪	九四八、三〇〇
他	大阪	一五九、六三九
枕	大阪	三二八、八一四
道	大阪	一五〇、一二八
枕	大阪	二〇二、六五八
枕	大阪	六、四〇七、三二八
枕	大阪	二七、一二九、七六九
枕	大阪	二九、二七三、六六〇
枕	大阪	七、一四六、六六七
枕	大阪	二六三、四五六
枕	大阪	一八二、九五〇
枕	大阪	三三三、一九〇
枕	大阪	一六七、五二六
枕	大阪	八八三、〇五〇
枕	大阪	二二六、三四〇
枕	大阪	八八三、〇五〇
枕	大阪	一〇九、〇四〇
枕	大阪	二〇二、三七八
枕	大阪	九〇、五五八
枕	大阪	三二、五〇〇
枕	大阪	五六八、〇八四
枕	大阪	四一八、五〇〇
枕	大阪	一七六、〇〇七
枕	大阪	二二六、九四〇
枕	大阪	五二、五二〇
枕	大阪	二七九、五七九
枕	大阪	一二六、五二八
枕	大阪	三、二七〇、〇五八
枕	大阪	一〇、〇〇〇
枕	大阪	二二二、九九六
枕	大阪	二五〇、七二二
枕	大阪	四三五、四〇〇
枕	大阪	六六一、二〇六
枕	大阪	九、七一八
枕	大阪	二〇二、三七八
枕	大阪	一〇九、〇四〇
枕	大阪	二、七七五、六二一
枕	大阪	五九一、七五〇
枕	大阪	一、三一七、〇〇〇
枕	大阪	一六八、四八八
枕	大阪	二九一、九四二
枕	大阪	一五二、三〇六
枕	大阪	二五〇、三一〇
枕	大阪	五、一三七、一八〇
枕	大阪	二八、八四一、四二七
枕	大阪	二八、〇三〇、四七六
枕	大阪	三、四五八、七三四
枕	大阪	一三〇、四七九
枕	大阪	三、一二四、六二八
枕	大阪	一二八、四〇〇
枕	大阪	一七五、八一三
枕	大阪	三〇二、二四六
枕	大阪	三三四、二五〇
枕	大阪	九三〇、七四七
枕	大阪	三九〇、七四七
枕	大阪	三〇五、五三六
枕	大阪	九八、三〇〇
枕	大阪	六一一、五九二
枕	大阪	六一六、〇七一
枕	大阪	一、三一七、二一五
枕	大阪	一六九、二九一
枕	大阪	七三一、五一二
枕	大阪	一六三、四二二
枕	大阪	二六三、四五六
枕	大阪	三、四五八、七三四
枕	大阪	二八、〇三〇、四七六

草履、箆	十五才マデ	五四	三〇	四六	六二	六九	七七	八五	八五	二七	三七	五四	一〇二
生果 石油函入	二才	一六	九	一四	一	一	二三	二五	二五	八	一一	一六	三〇
同 三百打入	十三貫七才	六三	三六	五四	七二	八一	九〇	一〇〇	一〇〇	三二	四三	六三	一一〇
同 二百打入	九貫四才	四八	二七	四〇	五四	六一	七〇	七五	七五	二四	三二	四八	九〇
燐寸 百打	六貫五三才	三二	一八	二八	三六	四三	四六	五〇	五〇	一六	一四	三二	六〇
罐 寸 百打	三貫五三才	三二	一八	二八	三六	四三	四六	五〇	五〇	一六	一四	三二	六〇
空セロ空樽函	一才ニ付	三五	二	三五	四・五	四・五	五・五	五・五	七	二	三・五	三・五	七
目 籠	十才ニ付	三五	二・五	三五	四・五	五・五	六・五	七	七	三	三・五	三・五	八
綿糸 廿玉入	十才	五二	二八	四四	五二	六四	七二	八〇	八〇	二五	三六	五二	九六
疊 表	一才ニ付	四・五	三	三・五	五・五	六・五	六・五	七	七	三	三	四・五	八
肥料 二合	一才ニ付	二一	一二	一八	二三	二七	三〇	三二	三二	一一	一四	二一	三八
石 油	三才	一四	八	一二	一五	一七	一九	二二	二二	七	一〇	一四	二六
メリケン粉 二合	同 才	一五	九	一四	一八	二〇	二二	二四	二四	八	一一	一五	二九

右は代表的海運業者たる大阪商船株式會社直屬の高松商船組と尼崎汽船株式會社との協定にかゝる貨物運賃表である、然し實際に於ては取引頻繁なる荷主に對しては割戻による割引を行ふことがある、其他種々なる取引關係によりこの運賃以下で實行せられてゐるものと思はれる。

前表中小荷物とは三才（一立方尺を以て一才とす）までのものであつて容積に比して特に重いもの、價額の低い高ものは此の内に含まれて居らぬ、等級品の中一等品と云ふのは一才の價額二十圓以上のもの、二等品とは五圓以上二十圓までのもの、三等品とは五圓以下のものを云ふのである。従價割増金と云ふのは特に高價品に付前記算定料金外に課せらるゝ料金である。又特に重量の大きいなるものは重量品として料金を課せられる事になつてゐる。

(6) 主なる海運業者

大阪商船株式會社取扱店、尼崎汽船株式會社支店、を初めとし宇和島汽船株式會社、住友汽船株式會社、内海汽船會社、攝陽商船株式會社、株式會社加藤海運商會、讃岐郵船株式會社は夫々本店、支店、代理店を設けてゐる。

大阪商船株式會社は阪神地方への貨客の輸送を主として取扱ひ尼崎汽船株式會社は阪神並に小豆島、宇和島汽船株式會社、住友汽船株式會社は阪神並伊豫、内海汽船株式會社は小豆島、攝陽商船株式會社は中國及本縣沿岸に航路を有つてゐる。株式會社加藤海運商會は主として阪神地方への貨物の輸送を目的とし、讃岐郵船株式會社は附近島嶼との連絡に従事してゐる。

(ロ) 陸 運

(1) 高松市を中心としたる鐵道、電車、軌道

高松市は四國と本州との最短距離に位して居るが爲め鐵道省は夙に本州四國間の鐵道連絡船を配置し、貨車航送を行ひ四國交通運輸の幹線として極めて重要視して居る。

此の鐵道連絡船によれば僅かに一時間にして中國本土に達することが出来るし更に岡山を経て大阪へは三時間餘、下關へは七時間餘にて到着することが出来る。

又高松市は四國鐵道線の起點であつて豫讃線、土讃線、高德線の三線が西に東に走つて居て松山へは四時間餘、高知へは四時間以内にて、徳島へは二時間餘で行くことが出来る。

市内電車は四國水力電氣株式會社の經營に係り、高松港棧橋より市の中央を南下して栗林公園に至り更に東へ進み屋島志度に至る。

高松電氣軌道株式會社線は高松市東南部より長尾町へ至り、高松と琴平町を結ぶ琴平電鐵株式會社の線は市中央部互町

を起點として佛生山町、一ノ宮村、瀧ノ宮村等を経て琴平に達し、支線は途中佛生山町にて鹽ノ江温泉鐵道株式會社經營の自動車と連絡し温泉地鹽ノ江に行つてゐる。

(2) 鐵道、電車、軌道ノ乗降客
乗客の部

高松	同	栗	四	琴	高	昭和五年		昭和六年		昭和七年		昭和八年		昭和九年	
						乗降客	乗降客	乗降客	乗降客	乗降客	乗降客	乗降客	乗降客		
高松	同	栗	四	琴	高	六一三、五三六	六八一、四三五	七二九、五七九	五九五、六七七	六一九、六四一	同	栗	四	琴	高
松	棧橋	林	水	松	松	一八二、四三七	一七五、七八〇	一六四、九九四	一七五、〇四九	一九三、六三二	同	栗	四	琴	高
軌	橋	橋	電	松	松	一〇五、七八〇	一〇九、三九三	一〇二、二六一	一〇六、八九八	一五一、九三六	同	栗	四	琴	高
道	橋	橋	車	松	松	一、六二三、五一八	一、二五九、〇〇三	二、五九四、〇五五	二、六八二、七六六	二、六六一、四九二	同	栗	四	琴	高
			道	松	松	六〇〇、〇七八	四八二、一一二	三〇九、九七四	一、八四五、〇四四	一、五三七、一〇二	同	栗	四	琴	高
				松	松	二二六、八九一	二九六、二四九	一七七、二二七	一九一、三九二	一三二、九〇四	同	栗	四	琴	高

降客の部

高松	同	栗	四	琴	高	昭和五年		昭和六年		昭和七年		昭和八年		昭和九年	
						降客	降客	降客	降客	降客	降客	降客	降客		
高松	同	栗	四	琴	高	六一六、七一三	六三一、七九一	七三四、一三九	五八九、三一九	六〇七、八八〇	同	栗	四	琴	高
松	棧橋	林	水	松	松	一六六、〇六六	一六〇、五六七	一六五、八四四	一七六、四一四	一九九、七一七	同	栗	四	琴	高
軌	橋	橋	電	松	松	一一二、三九九	一一一、四六二	一〇四、二三九	一〇七、二〇三	二〇一、五三九	同	栗	四	琴	高
道	橋	橋	車	松	松	一、六二三、五一八	一、二五九、〇〇三	二、五九四、〇五五	二、六八二、七六六	二、六六一、四九二	同	栗	四	琴	高
			道	松	松	六〇〇、〇七六	四八二、一一二	三〇九、〇七四	一、八四五、〇四四	一、五三七、一〇二	同	栗	四	琴	高
				松	松	二五八、四四六	二二五、七一四	二〇二、五四五	二一一、五三九	一八九、六六〇	同	栗	四	琴	高

(4) 鐵道貨物發着狀況

昭和五年	昭和六年	昭和七年	昭和八年	昭和九年	發送噸數		到着噸數		賃金		使用車輛	
					高松驛	栗林驛	高松驛	栗林驛	高松驛	栗林驛	高松驛	栗林驛
同	同	同	同	同	三一、八八八	三、七五八	一、二二〇	一、二四、八一五	三六、七六九	四、六二一	五九七	
同	同	同	同	同	三〇、六六三	四、四八六	二、五五三	九五、四四三	四四、一八三	七、〇〇三	五一三	
同	同	同	同	同	二六、四七二	三、二七三	一、八七五	七七、一五九	三〇、〇四六	六、五九八	二八八	
同	同	同	同	同	二七、七一	四、一一二	二、一四八	八〇、六五〇	三四、一七三	六、〇八七	三四七	
同	同	同	同	同	二八、五八八	四、二六八	二、〇九四	一一〇、八六〇	三六、三一五	六、三〇六	三六一	

(5) 自動車

市内交通機關としての自動車の發展は昭和五年に於ける三一三臺に對し同九年には六割増加の五三二臺を算してゐる。乗車料金は市内は大型なれば六拾錢、小型なれば四拾錢で車體は何れも優秀である、尙自動車營業者の商業組合も結成が出来てゐる。

市内には高松市街バス株式會社經營による市街バスの運行あり、料金極めて低廉であつて市内を縦横に連絡してゐる。次に貨物自動車に付いて見ると昭和五年に一八臺であつたものが同九年には五割増の二八臺となり貨物の運送に量と速力に於て多大の能率を擧げてゐる、運搬貨は一臺に付市内は大體二圓乃至二圓五拾錢程度である。

昭和五年	乗用自動車		貨物自動車		計
	臺	輛	臺	輛	
	二〇七	一〇六	二〇七	一〇六	三一三



同	同	同	同
九	八	七	六
年	年	年	年
三六四	三〇三	二九〇	二一〇
一五九	一四五	一三五	一一七
五二三	四四八	四二五	三二七

(6) 道路

市内に於ける國縣道、市道は昭和七年末より失業應急事業として舗装に着手し、爾後三ヶ年間繼續之を實施した結果今日に於ては主要道路にして舗装を施されないもの少なく、全國都市中でも道路美に於ては屈指の間に伍する様になつた。本市都市計畫街路事業は總工費三百三十八萬圓を投じ昭和十年度より同十六年度に至る七ヶ年繼續事業として執行するため目下着々準備を進めてゐる、本計畫に依る主なる執行豫定地は次の通りである。

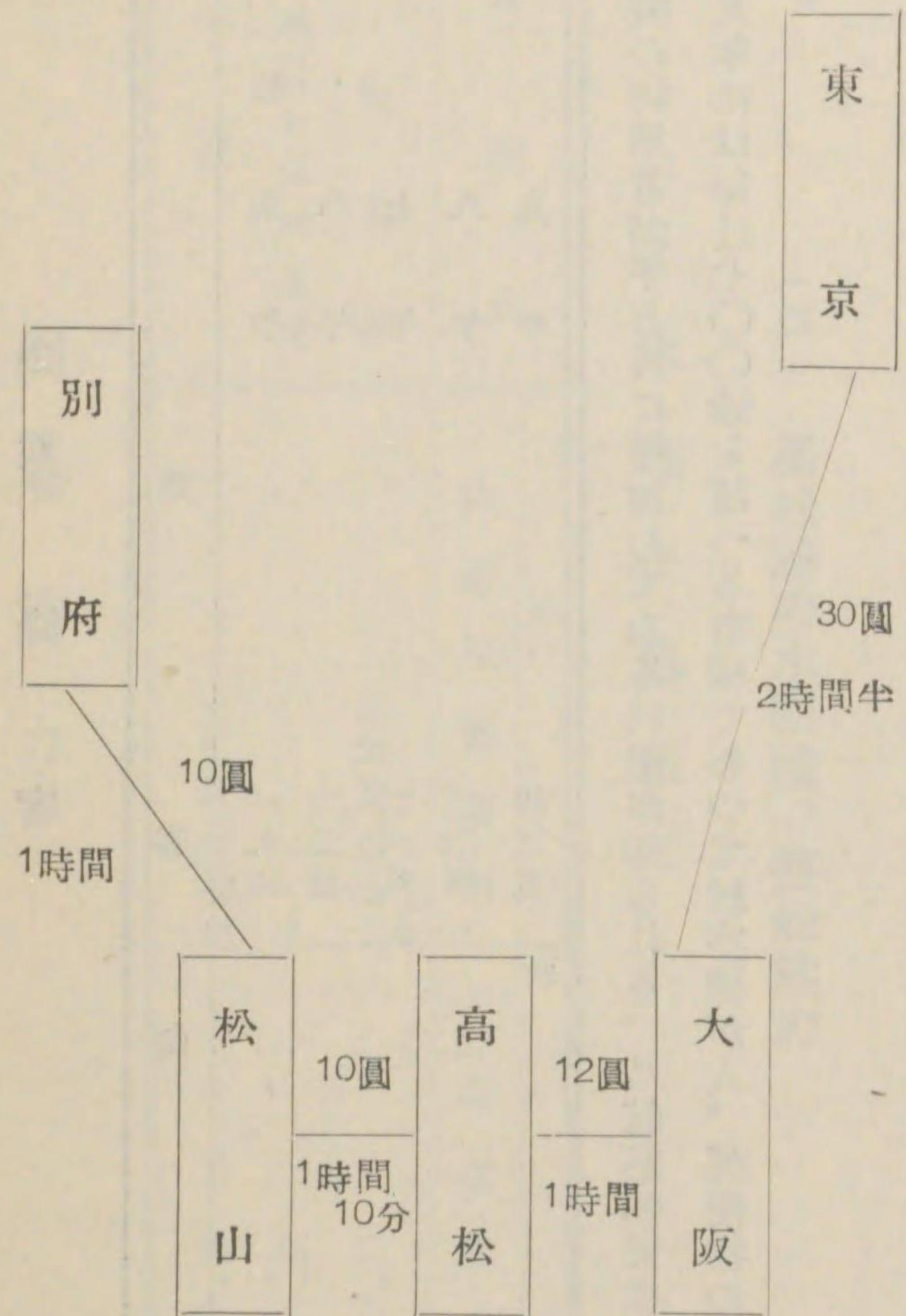
- (一) 高松築港より南進し栗林公園に到り更に東進して琴平電鐵株式會社栗林驛に至るもので高松港と南部町村との交通中樞をなすもの。
- (二) 本市物資集散の心臟部とも云ふべき東濱港の兩岸を臨港道路とし之より南進して國道第二十二號線に接續するもの。
- (三) 縣道栗林高松停車場線より東進して國道第二十二號線に達するもので本市東部隣接町村と市中央部及西部市街地とを連絡するもの。
- (四) 本市々街地の中央部を東西に縱走するもので西部住宅地と市中央部とを連絡するもの。

ある。

(ハ) 航空路

(1) 航空路

日本航空輸送研究所は高松を中繼點として其の航空路を大阪と松山とに結んで居る、一時間後には大阪へ更に二時間半を経ると東京に達することが出来る、時間並に料金を示すと。



(2) 乗降客

年	乗客	降客	備考
昭和五年	一九六	四〇二	
同 六年	二二七	四六六	
同 七年	二六八	五一一	
同 八年	三〇四	五九二	
同 九年	四二五	四七九	關西風水害の爲減少

航空機の利用者が年と共に増加してゐる状態が知られる、又航空郵便は昭和五年の頃毎月委託數二〇〇通であつたものが昭和九年には毎月七〇〇通を超へる有様であつて航空機が人、郵便物の運送に利用されつゝある盛況を察知することが出来る。

十一、工業用地

工場用地としては現在の市内に於ては廣大なる敷地を求めることは困難であるが市東方隣接地一帯は海岸に沿ふ廣大なる平地であつて將來に於ける都市計畫道路と築港の擴張と相俟つて水陸交通極めて便利なる工場地を求むることは容易である。

土地の價格は其の現在に於ける利用價值により區々で調査極めて困難であるが愈々工場を建設する場合に於ては相當の犠牲を拂つて比較的安價に工場地を得らるゝ見込である。

十二、港 灣

(イ) 高松港の沿革

高松港は最初高松市が明治三十年縣費の補助を得て修築工事を起し、工費三十二萬八千圓を投じて水面積八萬坪を抱擁する東西二條の防波堤を築造すると共に港内の浚渫棧橋の構築を企て三十七年九月之を完成したのである。其後船舶貨物の出入の激増に順應するため擴張の必要を生じ、高松港を縣の管理に移し、縣は工費二百二十萬圓を以て大正十一年七月より起工し昭和三年三月之を竣功したが更に目下擴張増渫の必要を痛感し其の促進運動を起すに至つて居る。

(ロ) 高松港の水面積、繫船能力

水深ト面積

水深別	水面積		計
	防波堤被覆内	防波堤被覆外	
七米未満	五五五、三七一 ^{平方米}	二、六七七、六八五 ^{平方米}	三、二三三、〇五六 ^{平方米}
七米以上九米未満	—	三、二七二、七二八	三、二七二、七二八
計	五五五、三七一	五、九五〇、四一三	六、五〇五、七八四

繫船能力

繫船能力	繫船噸數	備考
香川縣棧橋	八、〇〇〇噸	二千噸級汽船四隻
鐵道省棧橋	三、二〇〇噸	八百噸級汽船四隻
新湊町護岸	三、〇〇〇噸	百噸級帆船三十隻
玉藻町護岸	九、〇〇〇噸	二千噸級汽船三隻
東濱町護岸	七、〇〇〇噸	百噸級帆船七十隻
計	三、四、二〇〇噸	百噸級帆船四十隻

(八) 陸上設備

高松港の陸上設備は縣營物揚場十二ヶ所、鐵道省物揚場二ヶ所、會社經營の上屋及倉庫三十六ヶ所、石炭石油の積込設備八ヶ所、縣營野積場九ヶ所、給水給水設備八ヶ所等にして貨物の積卸及保管配給は甚だ便利である。

(三) 荷役能力
港内人夫

種別	員數	一人一日ノ平均賃銀	種別	一人一日ノ荷役能力
沖仲仕人夫	七〇人	一・八〇円	鹽、米	噸
濱仲仕人夫	二五〇	一・五〇	石炭、穀物、雜貨	噸
陸仲仕人夫	一四九	一・〇〇	同上	噸

十三、金

融

(イ) 金融機關

名	稱	資本金又ハ出資金	創立又ハ支店設置年月	位	置	電	話
株式會社日本勸業銀行高松支店		一一一、七七五、〇〇〇円	大正十一年二月	兵	庫町		二〇一〇
株式會社高松百十四銀行		一二、六二〇、〇〇〇	大正十三年三月(合併)	丸	龜町		四四〇一
株式會社讀岐貯蓄銀行		一、〇〇〇、〇〇〇	大正十年十一月	南	新町		二五三八
株式會社安田銀行高松支店		一五〇、〇〇〇、〇〇〇	明治四十五年六月	丸	龜町		二一〇二
株式會社中國銀行高松支店		一五、〇〇〇、〇〇〇	昭和五年十二月	丸	龜町		二五〇一
株式會社岡山合同貯蓄銀行高松支店		一、六二〇、〇〇〇	大正十一年二月	片	原町		二一三〇
株式會社不動貯金銀行高松支店		八、〇〇〇、〇〇〇	大正五年四月	兵	庫町		二五〇九
讀岐信託株式會社		二、〇〇〇、〇〇〇	大正十五年二月	丸	龜町		二八七五
香川第一無盡株式會社		一〇〇、〇〇〇	大正十五年十二月	外	磨屋町		三一六五
有限責任高松信用組合		六九〇、二四〇	大正十一年十一月	南	鍛冶屋町		四四六一

(ロ) 高松組合銀行預金表

月別	當座預金	特別當座預金	通知預金	定期預金	別段預金	諸預金	合計
昭和九年一月	一、一三三、五三三円	七、〇〇二、二七九円	八九六、七五四円	一七、四八二、六六五円	五〇六、四五六円	九七三、一九七円	三、七、一九四、八八四円
二 月	一、五三三、八九九円	七、二二二、四六三円	一、一七四、七三三円	一七、五四〇、二九三円	四九六、三三三円	九六八、八六四円	三、七、四六五、二〇三円

品名	銘柄	昭和五年度	昭和六年度	昭和七年度	昭和八年度	昭和九年度	平均
玄米 上	地方一等	二四・三〇	一九・一九	二四・四九	二三・二四	二八・一九	二三・八八
玄米 中	地方二等	二三・六〇	一八・八九	二三・九九	二二・九四	二七・八九	二三・四六
玄米 下	地方三等	二二・九〇	一八・三九	二二・四九	二二・四四	二七・三四	二二・九一
大麥	朝鮮	一一・〇〇	一〇・四八	九・八六	一三・七九	一五・三四	一一・〇九
小麥	朝鮮	一一・三〇	一〇・三六	一四・二四	一五・五〇	一五・六三	一一・六一
大豆	北海道	一四・六〇	一一・二〇	一三・九〇	一五・五〇	一四・七五	一四・一九
小豆	北海道	二九・二五	二五・五〇	二〇・七五	二〇・七五	二二・〇〇	二二・〇〇
粉	地方二等	三・三〇	二・七五	三・〇〇	三・五〇	三・三二	三・一七
鹽	地方二等	一・七〇	一・五五	一・五四	一・五四	一・五七	一・五八
味噌	地方二等	五・九五	五・三〇	五・〇〇	五・〇〇	五・〇〇	五・二五
油	地方二等	三三・〇〇	二七・〇〇	三三・〇〇	三三・〇〇	三一・〇〇	三一・四〇
酒	地方二等	六七・〇〇	六三・五〇	八五・〇〇	一〇七・五〇	八三・〇〇	八一・一〇
茶	地方二等	一一・〇〇	一一・〇〇	一一・〇〇	一一・〇〇	一一・〇〇	一一・〇〇
煎餅	地方二等	一〇・七五	一〇・五〇	一〇・五〇	九・三〇	七・五〇	九・七一
鰯	地方二等	三・六〇	二・七〇	三・七五	三・四七	三・五三	三・四一
牛	地方二等	一・六〇	一・三五	一・四二	一・七三	一・七三	一・五七
鶏	地方二等	一二・七五	一三・〇〇	一六・〇〇	一五・〇〇	一三・三五	一四・〇二
梅	地方二等	一・三〇	一・三〇	一・三〇	一・三〇	一・三〇	一・三〇
澤庵	地方二等	五・三五	四・三〇	三・五〇	五・〇〇	六・二八	四・八九

高松市物價表 (高松市調)

十四、物價

諸物價特に生活必需品たる諸品の價格は近都市の夫れに比して確に安價である。殊に昭和六年三越高松支店が當地に設置せられて以來は市中一般小賣商人のサービスは一層向上し經營方法にも多大の改善が加へられ一般消費者にとりては此の上もない幸福とされて居る。
 今諸物價の概況を示すと。

昭和九年	大阪及神戸	縣内及岡山縣	其他	合計
一月	一、四六、〇〇〇	一七三、〇〇〇	一三九、〇〇〇	一、四五八、〇〇〇
二月	一、四〇七、〇〇〇	七八三、〇〇〇	一六〇、〇〇〇	二、二〇六、〇〇〇
三月	一、二三五、〇〇〇	四六四、〇〇〇	六四三、〇〇〇	二、三四二、〇〇〇
四月	一、八一八、〇〇〇	四八五、〇〇〇	八八、〇〇〇	二、三九一、〇〇〇
五月	一、一四七、〇〇〇	五六四、〇〇〇	一、五六八、〇〇〇	三、二七九、〇〇〇
六月	五八六、〇〇〇	四一八、〇〇〇	三〇、〇〇〇	一、〇三四、〇〇〇
七月	八一五、〇〇〇	四八四、〇〇〇	四〇、〇〇〇	一、三三九、〇〇〇
八月	三六八、〇〇〇	五六二、〇〇〇	一七六、〇〇〇	一、〇六六、〇〇〇
九月	六八七、〇〇〇	一七五、〇〇〇	八〇四、〇〇〇	一、六六三、〇〇〇
十月	六八二、〇〇〇	二六四、〇〇〇	二四五、〇〇〇	一、一九二、〇〇〇
十一月	九七二、〇〇〇	二五一、〇〇〇	一四〇、〇〇〇	一、二三七、〇〇〇
十二月	七五一、〇〇〇	一七六、〇〇〇	一七六、〇〇〇	一、一二二、〇〇〇

十五、諸 税 負 擔

本市は古來より地勢上著しき天災に遭遇したることなく又大風水害等の被害も極めて稀であり従つて土木費の負擔は他の都市に比べて非常に軽減せられてゐる。

今諸税負擔の概況を示せば次の如くである。

(イ) 諸 税 總 額

年	國 稅	縣 稅	市 稅	計
昭和五年	二二九、八〇五・五二錢	四二五、七六一・〇四錢	四三三、九四七・九八錢	一、〇九四、五一四・四五錢
同 六 年	二〇二、一三三・八九	三八四、四一六・一七	四一五、二〇二・五一	一、〇〇一、七五二・五七
同 七 年	一八七、二四二・六八	三八八、八八三・二三	四二六、九九八・〇三	一、〇〇三、一二三・九四
同 八 年	二二〇、九一二・四六	三七七、六九九・四七	四四〇、二九七・四七	一、〇二八、八七九・四〇
同 九 年	二三二、九六〇・九三	三七三、〇七九・三四	四四八、三三五・三七	一、〇四五、三七五・六四

(ロ) 現住戸數一戸當諸税負擔額

年	國 稅	縣 稅	市 稅	計
昭和五年	一三・〇〇八錢	二四・二四錢	二四・九九錢	六二・三一
同 六 年	一一・二四	二一・三三	二二・〇三	五五・六〇
同 七 年	一一・一五	二一・〇八	二二・一四	五四・三七
同 八 年	一〇・一二	二〇・〇六	二三・三九	五三・五七
同 九 年	一二・一五	一九・四七	二三・四〇	五五・〇二

(ハ) 現住人口一人當諸税負擔額

年	國 稅	縣 稅	市 稅	計
昭和五年	二・八五錢	五・二八錢	五・四六錢	一三・五九
同 六 年	二・四五	四・六六	五・〇四	一二・一五
同 七 年	二・二〇	四・五八	五・〇三	一二・八一
同 八 年	二・四二	四・三四	五・〇六	一二・八二
同 九 年	二・六三	四・二二	五・〇七	一二・九二

(ニ) 四國各市諸税負擔額 (昭和九年度)

市 名	諸 税 總 額	一 戸 當 負 擔 額	一 人 當 負 擔 額
高 松 市	一、〇五四、三七六・〇〇錢	五五・〇二	一一・九二
丸 龜 市	三七九、七四九・〇〇	五六・九〇	一二・一八
今 治 市	一、四二二、四六六・〇〇	八一・九二	一六・五六
宇 治 市	七一〇、四一四・〇〇	六七・七七	一三・三六
高 知 市	六四七、四四三・〇〇	五七・〇六	一一・八五
徳 島 市	一、五四〇、六一七・〇〇	六二・九三	一四・六〇
徳 島 市	一、五四三、二四七・〇〇	七五・三一	一六・〇四

(ホ) 各種工場税負擔額 (百坪當概算額) 昭和十年度

種別	百 不 動 産 取 得 税 當	家 屋		計 税	備 考
		縣 税	市 税		
鐵筋コンクリート建	四五〇円	八一・六九	一六三・三八	二四〇・〇七	
煉瓦建	二七〇	四九・〇一	九八・〇二	一四七・〇三	
木造亞鉛葺	四五	八・四五	一六・九〇	二五・三五	
木造亞鉛張ブラック建	二四	四・二五	八・五〇	一二・七五	

結

語

高松市は瀬戸内海の要衝四國四縣の關門として海陸交通の重要地點を占め、本州との最短距離に位し、四國本州間の唯一の鐵道連絡船を有し阪神地方との交通は陸に海に最も至便であるばかりでなく工業資源の地九州方面とも至つて迅速に往來することが出来る。

又一面四國各縣を結ぶ鐵道は昭和拾年度末土讃線の開通成るに及んで全く面目を一新した、之に依つて四國の奥地に埋没されてゐた資源を開發して高松に搬出すると共に高松を経て各種の物資を此等後方地域に搬入することが容易になつて來た。

高松市は不幸工業用水潤澤ならざるの憾はあるが其他の工業要素は概ね整つてゐると言つても過言でないと思ふ、取分け優秀なる労働力の供給、天災地變の殆どなきこと、極端なる變化なき氣候風土と生活必需品の豫想外に低廉なること等は見逃すことの出来ない強味である。

商工省は最近國防其他色々な立場から工業の地方分散化を唱へてゐる、此際縣市當局に於ても縣市内に工場を新設せん

とするものに就いては能ふ限りの援助と努力とを惜まないと云つて居る、本會亦其目的達成の爲設立せられたものであるから工業振興の爲めには官廳方面と相呼應し協力一致して工業の興隆を期したいと思ふ、幸に工業振興に對し深き御理解と御同情を希ふ次第である。

工業としての高松 (終)

高松工業振興協會々則

第一條 本會ハ高松市及隣接町村(概ネ都市計畫地區)内ニ工場ヲ新設セムトスル者ニ對シ便宜ヲ圖リ諸般ノ調査斡旋ヲ爲ス外一般工業ノ振興ヲ圖ルヲ以テ目的トス

第二條 本會ハ高松工業振興協會ト稱ス

第三條 本會ノ事務所ハ高松市役所内ニ置ク

第四條 本會ニ左ノ役員ヲ置ク

會長 一人
副會長 二人
評議員 十人
理事 若干人

會長ハ高松市長ヲ、副會長ハ高松商工會議所會頭及ビ高松市會議長ヲ推載シ評議員及ビ理事ハ會長之ヲ囑託ス

第五條 會長ハ本會ヲ代表シ會務ヲ總理ス

副會長ハ會長ヲ補佐シ會長事故アルトキ其ノ職務ヲ代理ス

評議員ハ會長ノ諮問ニ應ジ竝會務執行及財産ノ狀況ヲ監査ス
理事ハ會長ノ指揮ヲ承ケ會務ヲ掌理ス

第六條 本會ニ書記其ノ他ノ職員ヲ置ク、職員ハ會長ノ命ヲ承ケ事務ニ従事ス

第七條 職員ハ會長之ヲ任免ス

第八條 本會ノ經費ハ補助金、寄附金及ビ其ノ他ノ收入ヲ以テ之ニ充ツ

昭和十一年十月廿六日印刷

昭和十一年十一月四日發行

【非賣品】

高松市役所内

高松工業振興協會

高松市南瓦町四一六ノ二

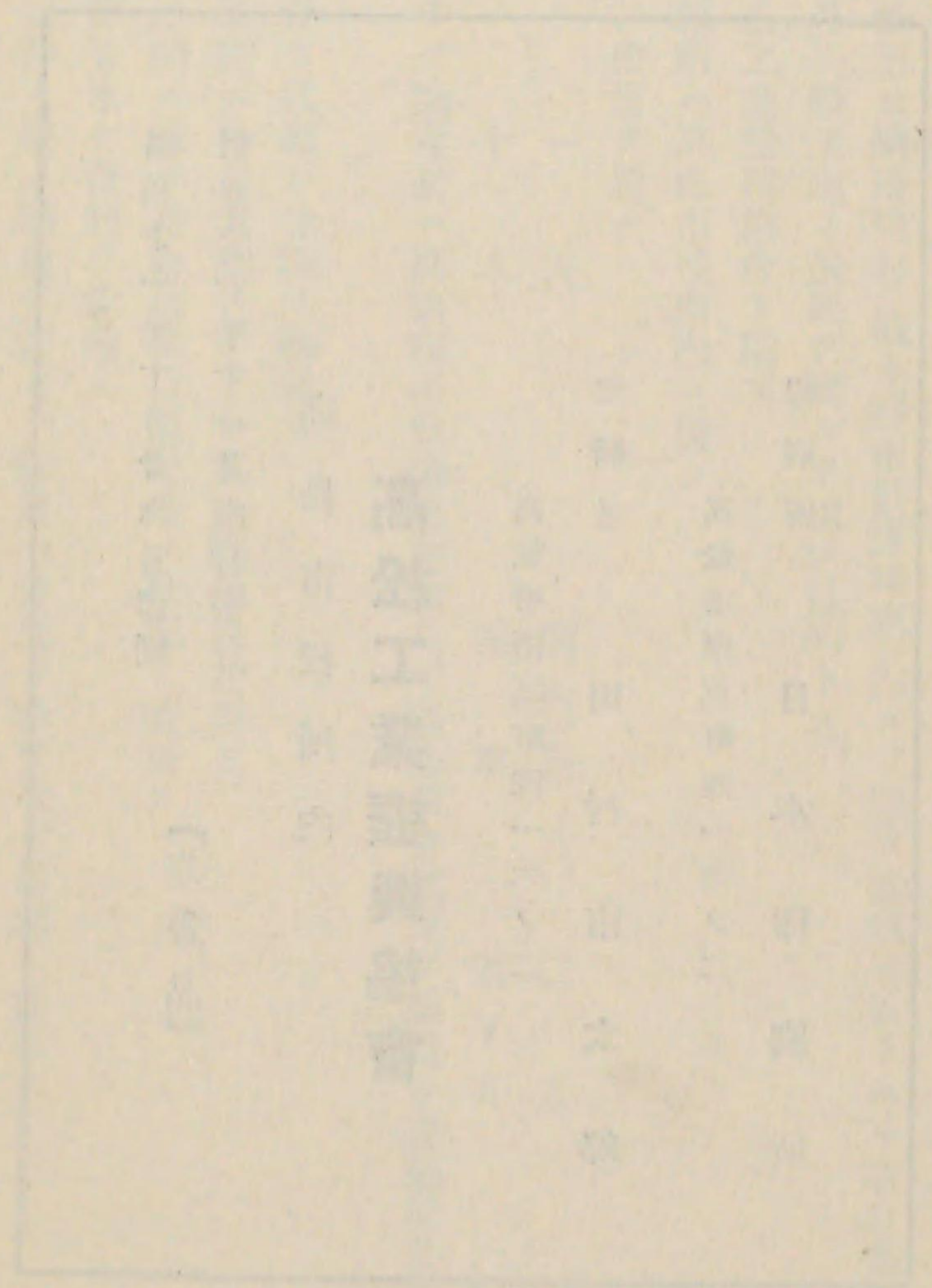
印刷者 田村市太郎

高松市南瓦町四一六ノ二

印刷所 日本印刷所

附圖

- 四國交通地圖
- 香川縣管內全圖
- 高松都市計畫圖



7
3



州圖

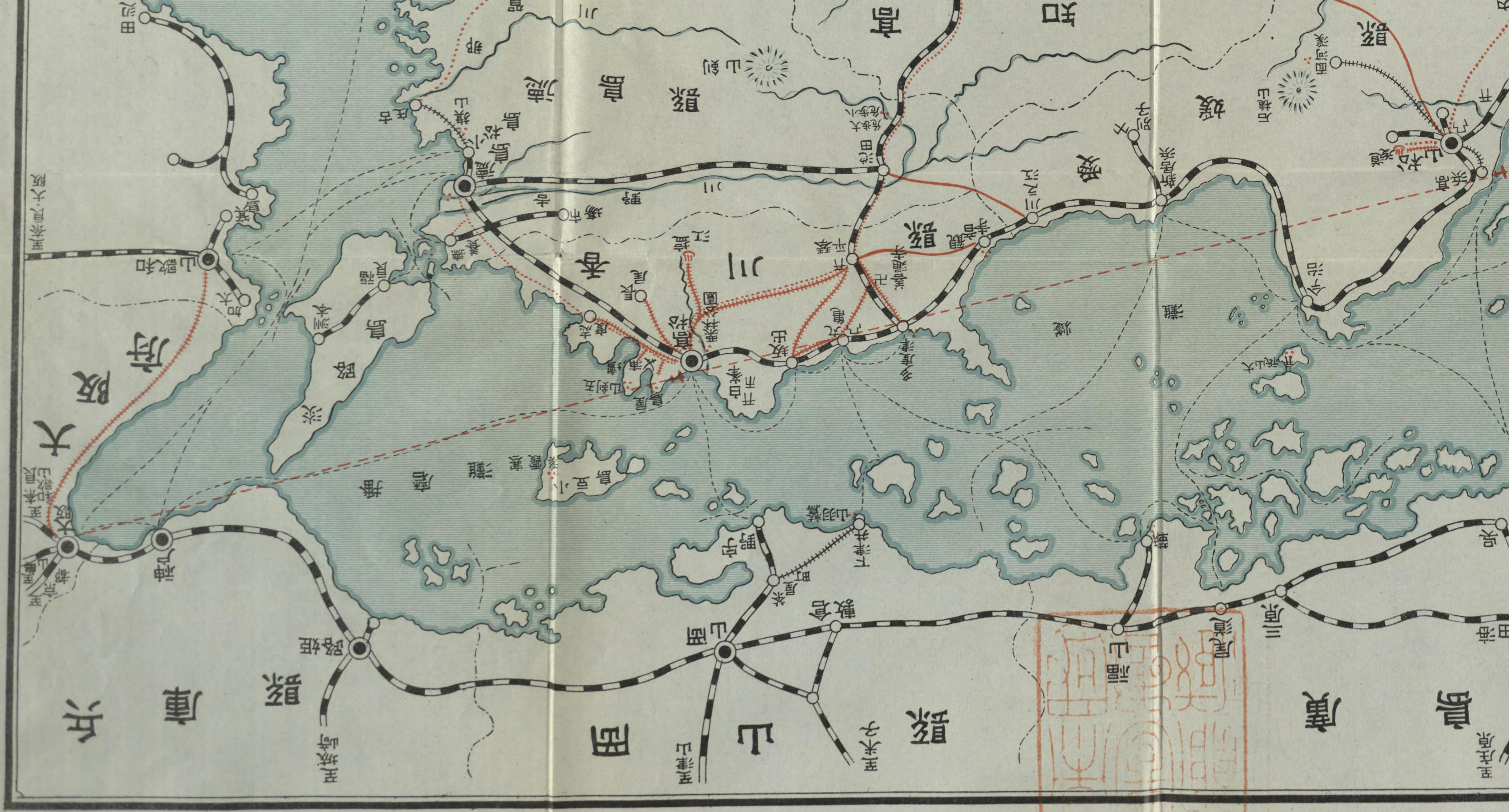
高野藩市指畫圖
 香川縣管内全圖
 四國交番軍圖



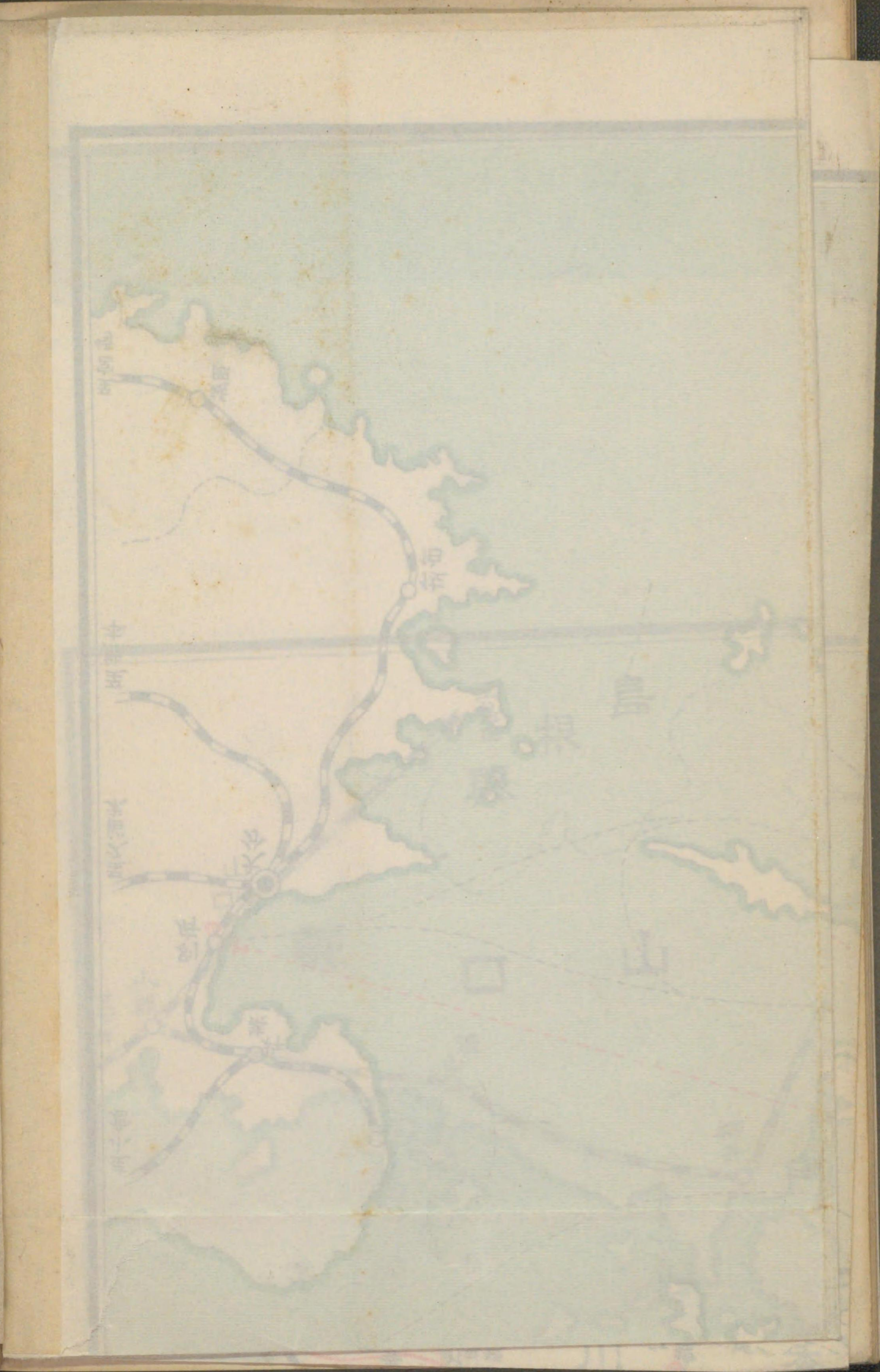
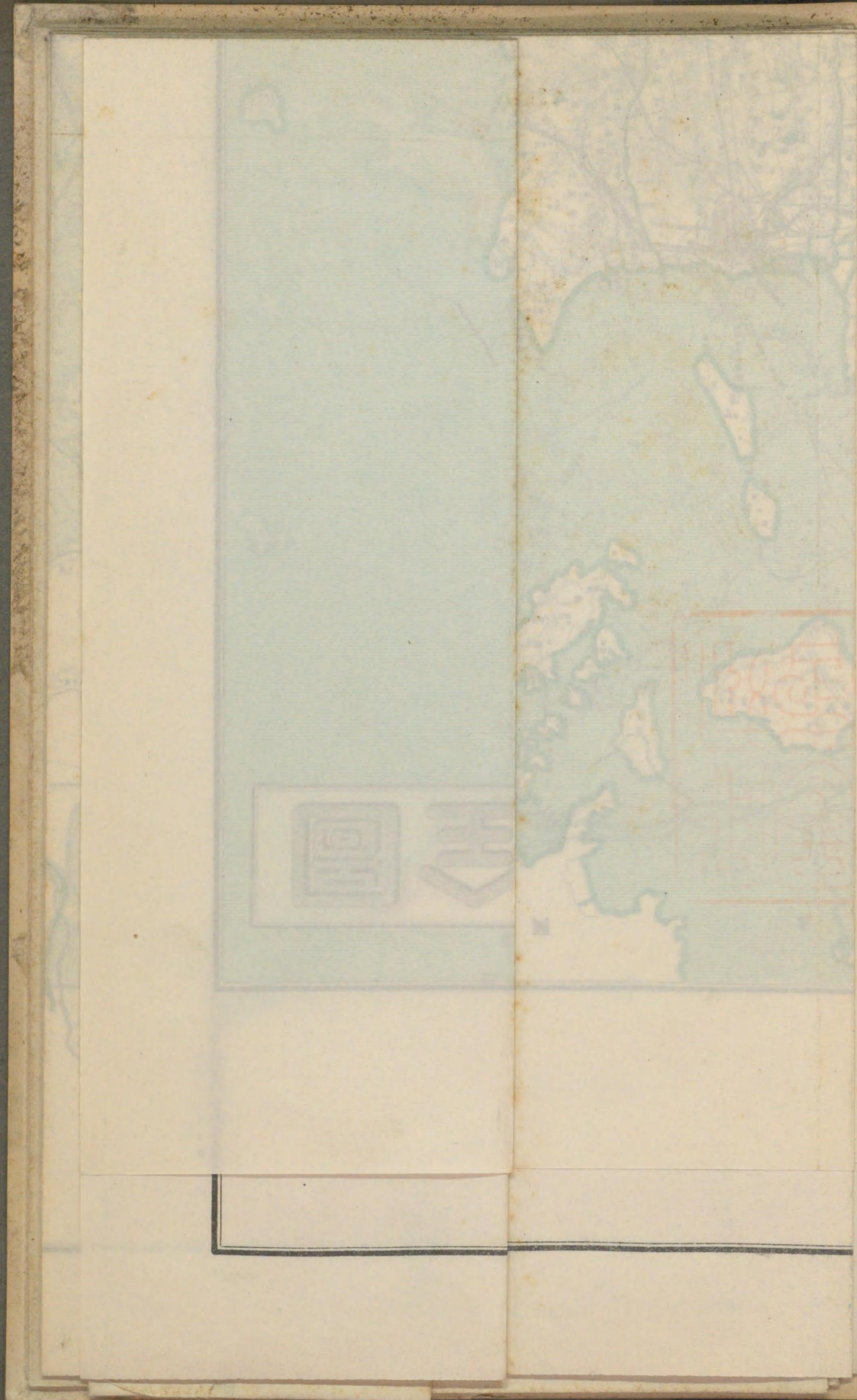
圖地通交國日



圖地通交國四

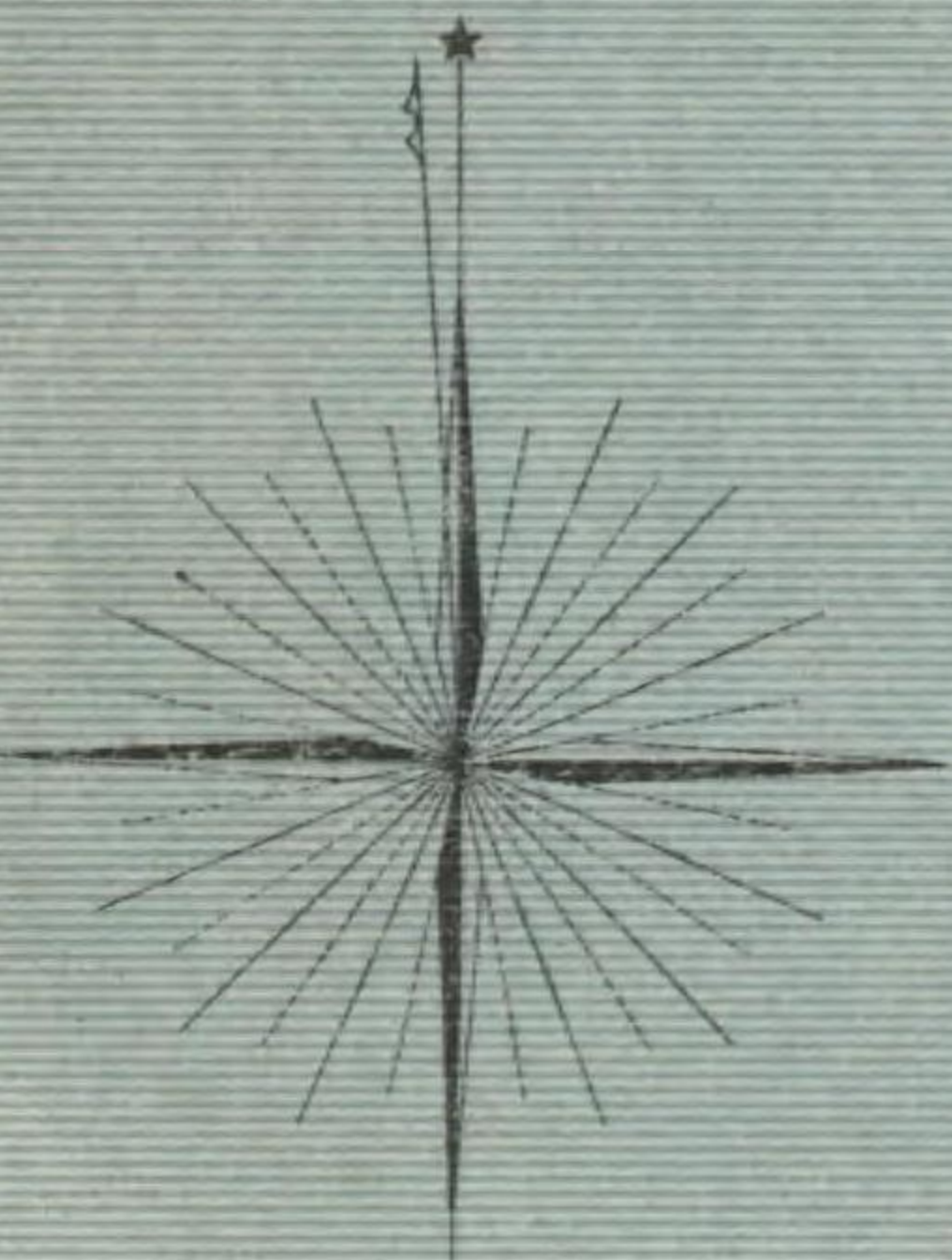


1707
306



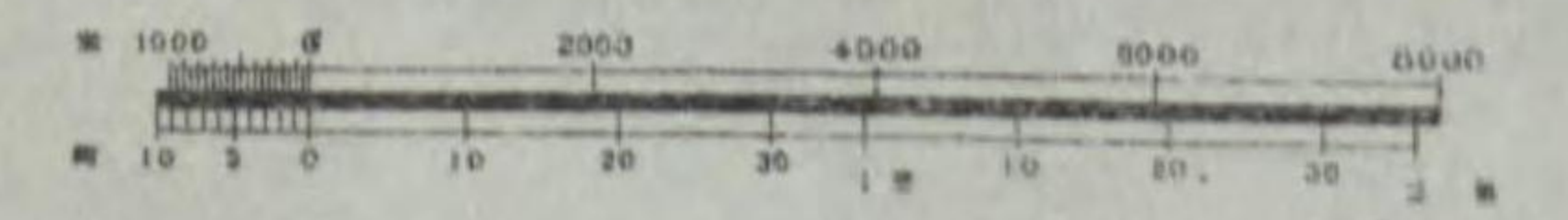


岡



大德

野板



例		凡											
		山	川	池	沼	村	郡	縣	鐵道	國道	支線	市街	市役所
		▲	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
		○	○	□	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲	▲
		指定港	白米港	海軍港	山	川	路	寺	所	院	社	會	司

香川縣管內全圖

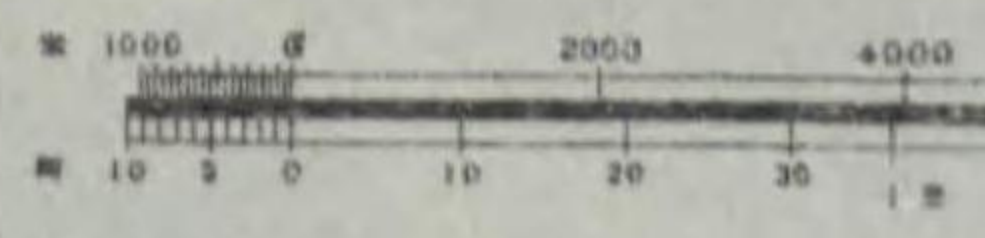




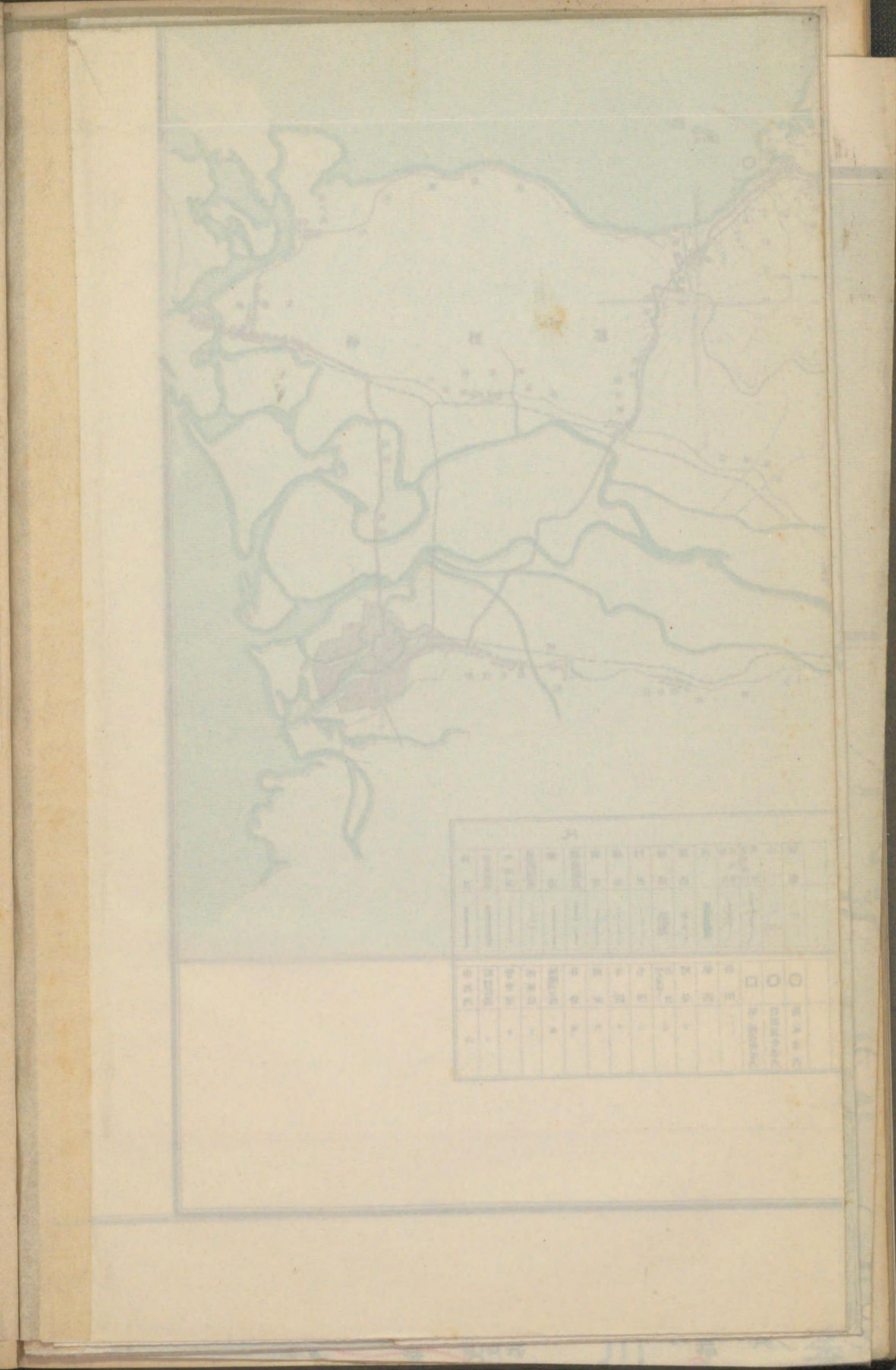
宇野郡
愛媛縣

三好郡

美馬縣
島



707
306



1707
306

折り込み部分

未撮影

1707
306

1707
306

[Faint, illegible text]

